



276号
湘南+新宿発

有事立法は戦争協力法

黙っていれば戦争になる——女たちのリレートーク
白いリボンは平和のマニフェスト 浮田久子
軍隊を捨てた国、コスタリカに学ぶ 池田真規
沖縄密約と個人情報保護法案 土江真樹子
構造的沖縄差別を許さない 崎原成秀
女性差別は国際社会に訴えよう 西村かつみ

資料・有事法制関連三法案条文

有事立法は戦争協力法

巻頭言 有事と無事	1
黙っていれば戦争になる	
——女たちのリレートーク—— 有事法制はいらない女性ネットワーク	2
白いリボン平和のマニフェスト	浮田久子 22
軍隊を捨てた国、コスタリカに学ぶ	池田真規 34
<hr/>	
■めじゃーなりすとのめ	
沖縄密約と個人情報保護法案 土江真樹子	44
■資料 有事法制関連三法案条文	
武力攻撃事態における国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保に関する法律（全文）	
安全保障会議設置法一部改正案（抜粋）／自衛隊法一部改正案（抜粋）	46
■意見・異見 女性差別は国際社会に訴えよう 西村かつみ	60
■TOPICS 甘いネーミングで人権侵害／危険「テロ資金供与防止条例」／	
防衛庁長官「自衛隊は軍隊」と明言／東京・多摩市長に渡辺幸子さん ほか	66
■集会から 鎌倉・子どもと教科書ネット21発足集会 ほか	71
■沖縄から 構造的沖縄差別支配を許さない 崎原成秀	74
■語りかけたいあなたへ 45 四月の恋 大里知子	76
■あごらのあごら 論議呼ぶ「男女平等条例案」/274号/ 退職しました ほか	78
<hr/>	
目次で振り返る『あごら』30年③（1978年1月～1980年5月）	82
<hr/>	

「有事」と「無事」

今国会に突如上程された有事立法は、論議も重ねないうちに公聴会の日程が示されるなどの焦燥ぶりに、かえって疑問と反対の声を大きくしている。

「9・11テロ」というような予測しなかった新事態が発生し、戦争の概念が激変しようとしている今、何らかの対策を考えることはたしかに必要なだろう。とすれば、「そもそも有事とは何か」「危機とは何か」といった言葉の定義から始めて、なぜ「事」が起きるのか、有事と対極にある（無事）とは何か、という根源的な問題に立ち返って衆智を集めないかぎり、「いのちを守る法案」は生まれない。

日本と同じく憲法に非武装を明記したコスタリカは、「軍隊を捨てた国」として知られるが、その現実には、日本との、大きな隔たりが感じられる。長い被支配と内戦の苦しみを経て、コスタリカは、「軍隊こそ諸悪の根源」と見きわめた。そして、「軍隊に代わる安心・安全の保障」として、積極的非武装中立と、積極的平和外交を推進するとともに、独立した選挙管理裁判所による選挙管理で、「国民の安全を守る議員」を選ぶ道を開いた。海に守られた日本とはまるで違う、いわば火薬庫の中のような中米で、人口三八〇万人の小国が、自国民だけでなく他国民のいのちも守り続けている実績は、世界を感動させている。

日本は、憲法九条を錦の御旗としながら、現実にはその精神を年々風化させてきた。その現実が、「有事立法上程」という、政府の暴走を招いたとも言えよう。有事立法を投げつけられたことは「（無事）の保障」を根元的に考えるまたとない機会。政治、経済、あらゆる面で信義を失った日本の姿勢を正し、憲法九条を揺るぎないものにするための、民の側からの積極的な法案提示も含めた学習と行動で、この禍を福に転じたい。

黙っていれば戦争になる

—女たちのリレートークから—

「有事立法」制定の動きは、予想よりもはるかに早いスピードで進行。「このままでは、今の国会で成立する」と、危機感に、いても立ってもいられず、全国各地で集会や街頭でのスピーチが連日 展開されています。その一つ、5月24日、12時から、東京有楽町のマリオン前で開かれた〈有事法制はいらない！ 女性ネットワーク〉のリレートークは、急な呼びかけでしたが、各地から駆けつけた女たちが、次つぎに思いを訴えました。話すことに慣れていない人たちだけに、切々とした思いがあふれていました。その抄録をお目にかけます。

いろいろな分野の女性が訴えます

戦争を許さない女たちのJR連絡会（司会 木瀬慶子）

ご通行中の皆さん、しばらくの間お耳をお貸し下さい。

これからいろいろな分野で活躍する女性たちがリレートークをします。私は司会を担当する（戦争を許さない女たちのJR連絡会）の木瀬です。

いま小泉首相は「備えあれば憂いなし」と、有事関連三法案を成立させようとしています。日本を戦争のできる国にしようというのです。

日本には戦争放棄を規定している憲法第九条があります。有事三法案は明らかに憲法違反の法律で、日本のあり方を根本的に変えるものです。命を育み育てる私たち女性は、子どもたちを戦場に送るわけにはいきません。子どもたちに暗い未来を引き継がせるわけにはいきません。働く女性が、市民が、一体となつて有事法制を廃案に追い込む大きな声をつくりだしましょう。

今日配っている花の種には憲法九条が書いてあります。ぜひ読んで、もう一度、有事法制の意味を一緒に考えていきましょう。

アジアを敵に回せば生存できなくなる

「慰安婦」問題を考える会 山下久子

国際経済を研究している者です。その立場で、日頃気になつてお話をします。

日常の食料の自給率が三〇%を切つてからだいぶたちました。去年の統計では自給率二七%を切つたと言われています。つまり、食料の七三%から七四%を、昔、大東亜共栄圏と言われたアジア周辺から輸入しているのです。

戦前と今の決定的な違いは、今はアジアの人びとの民主化を求める声が、かたちになり、政治になつているところだと思ひます。一九三〇年代は人びとの声はかき消され、最近まで周辺のいくつかの国では声を上げること自体、命と引き替えでした。私たち日本人は声を上げてても反対しても直ぐ命を取られることはないの、ぼやーとしているところがありますが、ぼやーとしていゝ間にどんどん悪い方向に進んでいゝように思ひます。

次つぎと出される法案。今この時に何で、どうして、と思ふのがいつわらざる感想です。しかし小泉さんのほうから見ないでアメリカのほうからものを見ると少し見えてくるところがあります。ブッシュは、カリフォルニアで不正

を働き大統領になつた。これを追求されそうになつたので、次々と戦争をしかけ、国民の目を別の方向に向ける。すでに公表されているだけでも一二四人がエンロン社から多額の献金を受け、クビが危うくなつています。

ブッシュは親ブッシュ、子ブッシュとも、カリフォルニアを中心にした原子力発電や核兵器を生産する会社から多額の献金を受けて大統領の基盤をつくつた。エンロン社は潰れましたが、核兵器の会社は、いま非常に危うい。コストが高く原子力発電は採算にあわない、というのがアメリカの現状で、その会社は風前の灯になつています。

親ブッシュの時に立証済みですが、核兵器や兵器の在庫を一杯抱えた会社の在庫一掃セールが湾岸戦争でした。今回も兵器会社が風前の灯になつて、会社として立ちいかなつたので、アフガンに戦争を仕掛けたのです。円換算で三三兆円もの金をぶんどり、大型兵器を小型兵器に買い替へることがすでに公表されています。ブッシュはそれで子分である小泉に脅しをかけた。金出せ、人出せ、もの出せ、と。だから戦時法制を、闇くもにつくらなければならぬことになるのです。

小泉のほうから見ると、あまりよく見えないが、ブッシュのほうから見ると子分である小泉を足蹴にして、「金を出

せ」とおどしている姿がよく見えます。

私たちが汗水たらして支払った税金を、がばつととられる。腹立たしいが、払いたくないといつても差し押さえられるからやむをえず払う。が、その金が兵器に使われるとなれば、関係ないと言つてられません。

戦時法律ができれば関係ない人びとを縛っていく。そのへんでよたつているおじさん、おばさんがオダ上げているのと、法律とでは、決定的にここが違うのです。言論には自由があるから何を言つてもいい、と小泉さんは言つてゐるが、法律となれば、「知らない」「関係ない」という人も全部縛っていく。鍋の水の中の蛙が、気がついたらちよつとずつ、ゆでられていた、そういう状態に私たちがいるのではないでしようか。

もう一つ。外務省というところは本当に悪いところです。私たちは「戦時性的強制被害者、戦時下における女性に対する性暴力を組織的・計画的に日本政府が行なった」という研究を三五年間してきました。最初は、被害者といわれる人は誰も名乗りを上げなかったが一九九〇年に名乗りを挙げ、その時から社会的に認知されてきました。日本政府は「女性に対する暴力は戦時下だから仕方ない。業者が連れ歩いたものだ」と言つていましたが、一九九二年八月に、

とうとう国会で関与を認めました。しかし、そこから何もしていない。認めたら次にごめんなさいというのが人の道ではないかと思うのですが、「謝る法律がない、賠償する法律がない」と言つてほつたらかし。今行おうとしていることの逆なわけです。「五十何年もたったことじゃないか」という人がいるが、五十何年たつても、組織的・計画的に誘拐され、強姦された人に対し、謝罪もしなければ賠償もしない。これが我が国日本の姿です。

いま海外に行く人は、一年でのペー千万人以上と言われている。通り一遍三、四日の海外旅行では気がつきませんが、親しくなつた時に何を言われるか。「ところで」、「あの問題はどうなりましたか」です。「ところで日本はどうして組織的、計画的に国家がやつた加害を謝らないのか」と言われます。一九九五年の四月から十月、国連人権委員会や他の国際機関から「謝罪しろ、賠償しろ」という勧告が毎回でています。外務省はそれを無視し、議員の先生は不勉強で、外務省の「勧告はたいしたことない」というのを鵜呑みにしています。

アジアの人が、日本が今やろうとしていることに対してどういう気持ちでいるか、ちよつとでいいから考えてほしい。「恐ろしい国日本」が見えてきます。

一九三〇年と今と決定的に違うのは、一九三〇年代は「恐ろしい国日本」に対しアジアの人たちは逃げる事ができなかった。でも今は、日本がアジアに、首根っこ、つまり食料をつかまれている。明日にでも食料をストップされたら日本人の生活を維持していくことはできない。根本から覆っていきます。

私たちが目指す道は、アジアの人と共に生きる道、アジアの人に、悪いことは悪かったと謝り、許して下さいと言うこと。そうすることで、和解のドアの前にやっと立つことができる。今、戦争をすぐできる法律をつくれれば、アジアの人たちから一遍で閉め出される。それは日本人が生きていけるかどうかの問題なのです。

ふだん心にとめていることがたくさんありますが、人前に立つのは恥ずかしいので、このへんにします。

畑から駆けつけました

埼玉九条連 吉村敦子

埼玉で農業をしています、いたたまれなくて駆けつけました。

「戦争法」である有事三法案が通過すると、女性や子ども

もが犠牲になることは目にみえています。アフガン攻撃で荒れ果てた土地に難民が何十万と発生しました。もしこの戦争法が通過すると、私たちは今のアフガン難民以上の悲劇を受けると思う。後に残るのは心の傷と自然破壊の傷です。私は百姓という仕事をしていますが、畑や田んぼも荒廃するでしょう。戦争が始まってしまったら、狭い日本の国土はどうなってしまうのだろうと、心配でなりません。

子どもたちを戦争に参加させることはできません。人殺しは、いけない。また殺されることがあってもいいけません。特に若い方の無関心が心配でなりません。この有事法制三法案は、あなた方に降りかかる法案です。もう一度、真剣に考えて、個人の価値観として判断してほしい。これは「戦争法」です。戦争法が皆さんにとっていい法案であるはずがない。皆さん、もう一度有事三法案を検討して判断して下さい。私たちは法案廃棄までたたかいぬきます。

戦争体験者として黙ってられない

憲法九条を守る会 堀 エイ子

こんにちば。私はだいぶ年寄りで、今まで十年余（憲法九条を守る会）の活動をしてきました。先日、議員会館の

ロビー活動に行きましたら、「武力攻撃事態法について関係者の方はお集まり下さい」という放送がありました。有事法制という名の中に隠されているのは「戦争」という文字です。私も戦争体験者は、ともかく戦争の悲惨さを体験してますので、どんなことをしても阻止したい。戦争を止めさせたいということを肝に命じ、運動に参加しています。よろしく願います。

いま闘わなければ、きつと後悔する

憲法九条を守る会 川島睦子

一九九一年湾岸戦争の時から署名活動を続けています。自衛隊を派遣しようという話がでた時に、鎌倉に住む主婦の笠井文子さんという方が危機感を感じて、お孫さんに太平洋戦争の話をしたんです。そしたら「おばあちゃん、だって何でその時に反対しなかったの」と聞かれたそうです。ズキッときて、「太平洋戦争の時は、とても反対なんと言えない状況だったけど、今ならまだ間に合う。もしこれをやらなかったら後々まで後悔する」と、〈憲法九条を守る会〉をほんのささやかな人数で立ち上げました。

「憲法九条は、戦争はいけない、やめなさい、という日本

の母ごころ」これをキャッチフレーズに、十二年間、毎月横浜駅前で首相宛の署名を続けてきた。しかし、この十二年間で今ほど憲法九条の存亡の危機を感じている時はありません。

有事立法が制定されれば、憲法九条そのものの、それから人間の自由や人権、すべてが抑圧されます。小泉首相は「備えあれば憂いなし」といつて有事立法の制定を言い出しました。しかし一番の備えは、世界の人びと、とりわけアジアの人びとと仲良くしていくことです。二度と戦争をせず、世界の人びと、アジアの人びとを大切にすることを誓った憲法九条を守り、有事立法を成立させないよう、頑張ってまいりましょう。

黙っていては平和は生まれない

憲法九条を守る会 広瀬真紀子

「有事」とは戦争のこと。戦争に労働者、市民を協力させ、いやだと言ったら罰則。これが「有事三法案」です。戦争はいやです。平和がいいです。しかし何もしないで平和になるものではない、皆さんの協力が必要です。平和になるための行動を一人ひとり協力してやりぬきましょう。

有事三法案の流れを止められるのは市民一人ひとりです。みんなで有事法制反対の声を出し続けましょう。

なぜアメリカのために闘うの？

神奈川九条連 松崎 都

私は今から四二年前の五月、大学に入り、すぐ安保闘争に参加しました。あの安保は、あのようなかたちで強制的に成立させられ、非常に挫折感を感じて今までの年月を過ごしてきました。

四二年の間に憲法九条は骨抜きにさせられました。でもまだ何とか憲法は存在しています。しかし、ここ何か月かの日本の情勢は、そのようなものすべてを洪水のように洗い流そうとしています。安保を闘ったあの時の情熱、危機感を思い出してほしい。今は安保以上の危機です。

「9・11のテロ攻撃をアメリカ情報部は一か月前に知っていた」というテレビ報道に非常に衝撃を受けました。そして「ああやっぱり」という気持ちを強くしました。日本が真珠湾攻撃をした時もアメリカ軍部はその情報を知っていました。が、攻撃をやらせて戦争に突入した。日本の軍部も中国大陸で「有事」を意識的に起こし、利用して、戦争を

遂行していった。私たちは騙されてはいけない。「有事」というのは、意識的に支配階層がつくり上げていくものです。

小泉首相は構造改革を掲げいろいろ言ってきましたが、結局は銀行にザブザブとお金をつぎ込んだだけ。中小企業の人、弱い立場の老人、みんな切り捨てられてきました。私は年老いた母と一緒に生活しているので、その痛みは非常に感じています。

五十年ほど前、小学校で第二次世界大戦のことを習った時に不思議でした。「どうしてみんな戦争をやめさせられなかったの」と母に聞きました。母は「そんなことでできなかったんだよ」とだけ答えました。私にはその答えは納得できませんでした。だから私は、大事な子どものため、孫のために、絶対に戦争を起こさせてはならない、とマイクを握っています。

今、唐突にこの法律が国会の俎上に登ったのは、アメリカのお先棒を担いで日本が戦争体制につつこんでいく準備にほかならないと思えるからです。

皆さん考えてください。アメリカのあの戦争のやり方を。アフガンで何をしたのか。日本人として日本の政府に、そして私たちの子どもに孫に、戦争協力をさせることは絶対

にはいけません。私たち女は、大事に大事に子どもを育ててきました。それが、すべて無にされようとしている。とても我慢できません。ぜひ一緒にたたかってほしい。

法案を賛成した議員一人ひとりを脳裏に焼き付けて、どの党が、どの議員が、どんな動きをしたか、選挙の時に絶対に投票しないことを肝に銘じましょう。この法案を何としても廃案にもつていきましょう。

一人ひとりが集まれば、一千、一万、十万、百万になる。

「一人くらいは」という考えは捨てましょう。一人ひとりが、「私が反対しなければ」という考えで法案に反対しましょう。

どんな人でも、抵抗の方法はある

「あこら」 斎藤千代

さつきから、いろいろな立場の人が、一心に話しかけています。どれも心にジンと響く話なのに、皆さん足早に立ち去る。非常に残念です。私どものような気の小さな人間までなりふり構わずこういう場に出て話をするのは、「本当に大変なこと」が起ころうとしているからです。「有事立法」と言われても何のことかわからないけれど、これはまさに「戦争準備法」なのです。「有事」と言われると、

私たちは地震とか洪水などをまず思い浮かべますが、政治家は、戦争の危険があるぞ、と言う。だから「有事を想定した法律が必要だ」というのです。

何が「無事」で何が「有事」か。「戦争の危険」は何によつて認定するのか。その細かい区分も論理的に組み立てられてない状況の中での法律です。「これは治安維持法みたいなものか」という国会での質問に対して、「治安維持法ではないが、国家総動員法と言つてもいいだろう」と、防衛庁長官がはつきりと答弁しています。

「前の戦争では抵抗する方法がなかった」という話を何人かの方がなさいましたが、それは戦争の前に着々と悪い制度が敷かれていたからです。もつとも有名なのが「治安維持法」と「国家総動員法」ですが、いまその治安維持法と国家総動員法の両方が一度に制定されようとしているのです。

一つは個人情報を守るという名目、あるいは人権を守るという非常に美しい名前のもとに、人権や個人情報、表現の自由を押さえ込む法律がつくられようとしています。まさに治安維持法ですが、個人情報保護法といった言い方をしているの、わかりにくいのです。

「有事立法」も、「国家総動員法がつくられようとしている」と言えばドキッとするのに、新聞の見出しにもなつて

いない。国会の議事録を読まなければわからない。真実を知らせまいとする情報操作の中で進められているから、気がついた時には鳥もちにすっかり足をとられたように、何もできなくなっているでしょう。戦前と全く同じ、非常に危険な状況です。

そんな大事な法律の制定を、普通の市民が抑止できるだろうか。心配になりますが、でも誰にでもできることがたくさんあります。例えば、いま私が胸につけている白いリボン。これは9・11直後にマリオン前で女たちがアピールした時に渡されたものです。アメリカのコーネル大学の学生が始めた。

9・11でアメリカ全体がヒステリックな状態になった時に「国家がどんなに締めつけようと、こういう状況はおかしい。白いリボンをつけて、平和を願う自分たちの意志表示をしよう」と始まったのだそうです。日本でも少しずつ広がっています。

それぞれの人が胸にリボンをつけて、国がどういう方向に動こうと、一人ひとり自分の命を守っていく。アメリカの属国になり戦争に巻き込まれるのは反対だということを、はっきり表明していきましよう。電車の中の半分がリボンをつければ、「有事立法という戦争準備」は防げます。「世

論は二〇%が支持すれば動く。四八%、五一%になれば新しい世論に変わる」と社会学者は言っています。八〇%を超えた小泉の支持率が急速に落ちてきました。今こそ逆転のチャンスです。

チラシと一緒に配っているのは花の種です。弾丸や爆撃機など恐ろしいものを増やさないで、私たちは白いリボンの花や可憐な花を咲かせませんか。

それぞれの心に花やリボンが満ちた時に、日本はこの状態から抜け出せる。自分にできること、今日からできることがたくさんある。その一歩を皆さんと一緒にやり続けたいと思います。

ヤバイ！ ヤバイ！

東京都 池田雅美

皆さんこんにちは。配っているチラシをぜひ手にとって下さい。私は飛び入りです。インターネットを見て有事法制に反対しているところにぜひ参加したいと、いてもたってもいられなくて今日は来ました。皆さん、ぜひ一緒に有事法制に反対しましょう。

有事法制は来月あたまにも通過しようとしている。国民

をバカにしますよ。わざわざの審議しかせずに、通そうとする。政府は有事法制が、国民にとつて意味するものなど、全然明らかにしてない。今、大きな声で反対すべきだと思います。

今回の法案に無関心でいては、まずい。命と生活にかかわる大きな問題だと思う。なぜか。今回の法案には日本が武力行使をするということを堂々と書いてある。これは平和憲法の否定です。

インド洋に自衛隊が行ってアメリカに燃料補給していても、国会答弁でも「インド洋にいる自衛隊艦船が攻撃されたら日本も武力行使する」と言ってますよね。これってすごいバイバイじゃないですか。日本がどんどん戦争に参加していつ、これに私たち市民も巻き込まれていくというのは、ものすごく恐ろしいことだと思います。

日本政府はアメリカと一緒にテロをやつつけるとか言ってますが、皆さん、これって許したいと思いませんか。アメリカは、アフガンの子供や女の人を、たくさんたくさん殺しました。こういうアメリカと一緒にやって日本が「戦争する国」になるというのは、ものすごく恐ろしいことだと思います。小泉さんは「備えあれば憂いなし」と言ってるけど、ごまかされちゃバイと思うんですよ。

いったい何に備えるというのか。私は、こんな有事法制は絶対に反対です。ぜひ皆さん、立ち止まってこのチラシを受け取って下さい。そして一緒に有事法制に反対していうではありませんか。夕方の集会にも参加して一緒に大きな声をあげていきましょう。

*

(ここで三人の若者が、アクロバティックなダンス。やつと人だかりができ、盛り上がる。

プロ顔負けの踊り手たちは、慶応大学ダンスサークル(ジエード)のホープとか。若い男性も、こんなに能動的に参加している。スピーチをしている人、聞いている人、みんなの顔がバツと明るくなった。)

変革しなければ「死」しかない

作家 武田英子

調布から来ました武田です。若い三人の方、素敵でしたね、ダンス、とても格好よかった。若いしなやかな身体能力の素晴らしい方たちの動きを見ながら、戦争になったらこういう若い力のある方が真っ先に引つ張られるんだっとなあと思いました。戦争中には、「男だったら少年兵にな

り戦争に行くのに」と考えていた世代です。

有事法、戦争法ですね。これは陣地の構築だのいいながら、じわじわと身辺を、人の死、破壊へと結びつけてゆく法律です。法律なのにそれを明確に言いません。とても危ない法案です。

私は、子どもの本を書きながら沖縄や中国大陸の被害者の方たちを訪ねて歩きましたが、戦場になった沖縄のことを忘れないで下さい。あれが「有事」だったのですね。

「本土決戦」ということを戦争中に言われ、本土にも陣地が築かれて、戦車や銃砲で陣地が構築されていった。明日生きられるかどうかからなかった。「有事」はそのまま「戦争」です。有事法がとおれば沖縄と同じ戦場になる。それが本土で展開されることを、ぜひ結びつけて考えて下さい。

沖縄の助産婦さんの話を聞いて歩きました。戦争の最中、新生児を抱えた母親を助産婦さんは必死で介護した、と。

「でもね」と年とつた助産婦さんは言いました。米軍から艦砲射撃を受けて、とても逃げることはできなかった。サトウキビ畑や大きな墓の隅に女性を引き入れて赤ちゃんをこの世に誕生させたそうです。でもお母さんの顔に笑顔はない。「生まれたのに、この子死ぬのね。もう生きられないのねえ」という言葉を聞くのは本当に辛かったと。事実、

泣き声をたてる幼子たちは日本軍の兵士に殺されていた。敵を攻撃すると敵から攻められる。それはそこに住む人びとを巻き込んだの皆殺しになる。それを今、有事という言葉で隠して言ってるのですね。「有事」とは、自国民の命も、若い人の命も、みんな奪う、非常に悲惨な内容を含んでいるものです。絶対に許してはなりません。

第二次大戦中の東京では、今のマリオンの場所にあった日劇の外壁に「撃ちてしまえ」という巨大な文字の幕が垂れさがっていました。弾丸を構えた兵隊が相手に向かって突き進んでいく、大声を上げて死地に突貫していくそのままの姿が映された大きな垂れ幕です。戦争中教えられた精神でした。「自分を殺して命を投げ出して敵を討て」という教育を受けてきた。それから五十年、六十年、七十年、生きながらえながら、あの戦争は何だったのか、あの教育は何だったのか問いなおしながら、その事実を子どもたちにも伝えたい、お母さん、お父さんにも読みとってほしい、と記録を続けています。

*

先日中国に行きました。第二次大戦で使われた毒ガス兵器を追いかけて。

毒ガスは秘密兵器として作られていました。国際法では

使用を禁じられていたのに、日本軍は絶対に使つてないと公言しながら、日中戦争の初めから各地で使つていた。

毒ガス戦に巻き込まれた農家の人びとを訪ねました。

地下道を掘つて農民が隠れていたが、見つかり、弾丸が投げ込まれ無惨な死を遂げた。かろうじて生きた人たちは女も子どもも、突かれ、切られ、蹴られ、最後には火をつけられた。その中で生き延びた人は、忘れないために記念堂を建て、当時の状況を壁画に残して永久の記録としています。

毒ガスをつくつた日本の徴用工や学徒は、「これは秘密兵器だ」と言われ、どういう力があるのかも知らずに製造にかかわり、その過程で悲惨な負傷を負い、癒えることのない傷を負つたのです。「これは使われない兵器、いざという時のための秘密兵器」と教えられていたのが、戦後多くの人が傷ついたことを知り、「自分は毒ガス被害者であり、同時に中国にも被害者をつくつた加害者だった」ということに、非常にショックを受けています。

被害者であると同時に加害行為もしてきた。加害を戦後五十年たつても精算できない政府の下で、私たちは、民衆同士が変革しあい、中国に、韓国に行き、東南アジアに行き、戦争で傷ついた従軍慰安婦の人たちとも力を合わせて告発し、補償を求めているのが今の状況です。

人と人とが心を開き交流しながら、戦争の傷を未だに癒しきれていない中での今回の有事立法。あの歴史を、政治家はしっかりと見届けていない。何の変革もしていない。

変革は生きることにつながる。命を育ててきた女性たち、こうしてピラをまいている一人ひとり、ピラを受け取つて読んでくれる一人ひとりから始まつて、大きな力にならないと誓い合つた教育者たち、母親たち。生命を守ろうとする力を、今こそ結集しなければ、日本の明日はない。戦争体験者の方は若い方に語りついでほしい。お願いします。

看護師は、即、戦争に動員される

日赤看護師 太田千枝子

私は日赤病院の看護師です。三十年間、看護婦、看護師として働いてきました。いま有事法制が国会で審議されると聞き、本当に心配で駆けつけました。国会審議を聞くと、「日本が武力攻撃されていないにもかかわらず、自衛隊が米軍の起こす戦争に加わり、武力攻撃できる」という、とてもない中身であることがわかりました。

この法律が通ると、戦争になったとき傷病兵が生まれる



有楽町のマリオン前で、有事法制は国民の医療を守れないと訴える太田さん(上)

リレートークは、急な呼びかけでしたが、各地から女たちが駆けつけ、憲法9条を書いた花の種を添付したチラシを配り、次つぎに思いを訴えました(右)



から、医療体制が不可欠になる。看護師、医師、多くの医療労働者が多数動員されることになる。

傷病兵を治療し、完治したら、また人を殺すための戦場に送り出すという、人殺しの戦争遂行システムに、医療機関、医療労働者は丸ごと組み込まれることになる。医師、看護師、放射線技師など、真っ先に徴用されることになる。大変な法律です。日赤で働く看護師の先輩は、従軍看護婦として第二次世界大戦で三万三千人もが戦地に赴きました。当時は女性でも何とか国の役に立ちたいと思い、日赤の看護婦を目指した人も多く、満州や南方へ大勢行った。そこで筆舌に尽くせぬ体験をしたそうです。

先輩の従軍看護婦さんから話を聞く機会がありましたが大勢が死んだ。銃弾で倒れたり餓死したり結核で倒れたり、動けなくなった兵隊を、クレゾールを注射して死なせるようなこともいっぱいしてきたそうです。最近聞いた話では、傷病兵が怪我をしていれば従軍看護婦たちの血を輸血した。そういう体験をもつ日赤で働く私たちは、この有事法制はどうしても阻止したい。

自衛隊法百三条では物資や施設には收容命令が出せる。人には業務従事命令が出せる。業務従事命令は、医師、歯科医師、薬剤師、放射線技師、看護師、保健師、准看護師

にかけられる。それ以外の職種も対象になると思います。

国立や自治体病院の職員は業務命令で狩りだされ、日赤も指定公共機関になったので、そこで業務従事命令が出されます。今までのように赤十字の国際組織のアピールを受けて行きたい人が行くのではなく、業務従事命令で強制される。民間病院の看護師も行くことになるでしょう。すべての医療労働者が狩り出されることになると思います。私は日赤が指定公共機関になったことを聞き、ご飯が食べられないくらいシヨックを受けました。

わかったことは、自衛隊法百三条でも、指定公共機関でも、両方から命令を受けられ、責任と義務を背負わされ、逃れることができないということ。戦場に狩り出されるだけでなく、働いている病院に傷病兵が運び込まれたらどうなるのか。入院している患者さんは追い出され、会議室やロビーが病室になったり、地域医療を守ることができなくなる。第二次大戦のさなかには、日赤病院はほとんど軍の病院として接収されました。軍の病院になると決まっただけで、その日のうちに全員の患者さんが追い出された例がいくらかもあるそうです。

有事体制になれば国民の医療は守れない。日本の医師や看護師は、EUの二分の二かアメリカの四分の一しかないな

い。戦争になり大勢の看護師が戦地に行くことになれば医療現場は壊れてしまう。医療事故も多発するでしょう。

私は命を守る仕事としてこの仕事を選びました。誰にも殺されたくない。誰も殺したくありません。再び従軍看護師になることを私は拒否します。私たちはみんな拒否して牢屋に入ろうと話合ったんです。

六月四日、「白衣の集会」を準備中です。皆さんピラを受け取り、「有事法制はどうしても通してはいけない」と本当に思っただけ。一人ひとりができることを精一杯やり、法案阻止のため共に頑張りましょう。

有事法制が通れば日本は攻められる

ソプラノ歌手 近藤日佐子

素通りしている皆さん、有事法制ができると日本は本当に外国から攻めてこられるかもしれません。しっかりと今の政治に目を向けて下さい。

チラシを取らない皆さん、「本当に攻めてこられる日本」になったらどうしますか。若い人は兵隊にいかなければいけないかもしれない。その思いをこめて「地球星」を歌います。

地球星

1. いくさが終わって 春のかぜ
たたかい疲れた その国からも
地球をめぐる ふいてくる
空も 海も つづいてゐるのに
なのに 人の心だけが
として よどんで 流れないの
おなじことばで 話しあえたら
とけあうでしょうか ぶんかも
神も

2. いくさが終わって 立ちつくす
がれきのなかに ぼうぜんと
世界の政治の まずしさに
いっしょに泣いてる 私たちです
平和の憲法 第九条を
世界の友に いま つたえたいの
武器をすてたら いつの日にか
仲良く くらせる 地球星

(すてきな歌詞とメロディー。)

よくとおるソプラノに、立ち止まる人が増える。)

皆さん、平和という山を登るときに武器を持たないで登るか、武器を背負って登るか、その違いで左と右の考えはあるでしょう。でも有事法制が通ると、日本は必ずどこかの国から攻めて来られることは明々白々です。知らん顔して通っている方、特に若い方。あなたは兵隊に行かなければならないかもしれない。それが目の前に迫っているということを心に留め、心の目を開いて下さい。日本の素晴らしい憲法を世界のものにするよう一緒に取り組んでいきましょう。

今すぐ抵抗しなければ間に合わない

日本婦人有権者同盟 紀平梯子

ご通行中の皆さま、お待ち合わせの皆さま、携帯電話を使っている方には少々ご迷惑かもしれません。でも、しばらくお耳を貸してください。

いまピラを配っている若い女性たちは、みんな政党や特別の政治団体の人たちではない、皆さんと同じように、その日を安らかに送りたいと願ひ、現場で働いている女性たちです。そういうみなさんでお金を出しあつてこのチラシを作りました。どうか受け取って下さい。これは人ごとでは

ない、みなさん自身の問題です。

戦争がこの地球上から絶えないのはなぜでしょうか。どこかに悪魔が住んでいるからでしょうか。あるいは悪の枢軸といったブッシュ、それに賛成しかねない日本の総理大臣たちが考えるように、何か特別の人がいて、戦争を起すんでしょか。戦争の原因は貧困と差別です。戦争はいきなり始まるのではない。だんだんにじりじりと状況ができてきて戦争になるのです。

私は戦中・戦後派の人間です。日本は、あの悲惨な戦争で大勢の国民が命を失い、家庭が崩壊しました。特にアジアの諸国に迷惑をかけたままでしたが、戦争が終わって、平和という状況が私たちに返ってきました。

あれから五六年あまりたちました。「二度と戦争をしない」ということを前文と第九条に誓った日本国憲法を国民総意でつくったはずです。すべてを失った日本で、ただ一つのよりどころになったのが日本国平和憲法です。日本国憲法のお陰で第二次大戦後もなお世界の方々と戦争が行われた中で、唯一日本は、「戦争をせず、武器を製造して外国に売ってもらうたりしない、原爆を持たない国」として復興しました。日本人の幸せ、福祉を守り続けてきた世界最高の憲法が、いま「有事立法」で崩れようとしています。

ごく近年に限って言えば、有事立法の始まりは、九一年の湾岸戦争です。たった十年の間に日本は戦争ができる国、戦争をする国の仲間に入ろうとしている。有事三法案という戦争法律、戦時立法が、いま審議されているのです。

湾岸戦争の時は国民の多額の税金をアメリカに差し出して、多国籍軍に協力した。それでもアメリカなどに、「金だけ出して人も出さない、血も流さない」と言われた。その非難を口実に、日本が戦争に参加することができる法律、PKO法が国会を通過した。そして九九年、憲法調査会設置法と新ガイドライン関連法はじめ、戦前回帰への種々の立法の後は一瀉千里。その中で日本の状況は最悪になりました。経済の落ちこみが国民の生活を不安定にし、東京のあちこちには路上生活者が非常に増えている。人を殺してでも金をとるという凶悪な事件が日々のニュースになっています。まず国民の生活の安全保障が第一。健康と命、食生活から始まり、人のいのちをどう守るかを最優先するのが本当の政治の目的のはずなのに、なんと「有事立法」がつくれようとしているのです。

九条破りの有事法制ができて本当にいいのでしょうか。もともと政治は力で動く。その力の源泉は、悲しいことに金です。金権・腐敗選挙からくる日本政治の汚濁の中で、

議會制民主主義が今崩れようとしています。頼りになるのは心ある国民です。私たちお互いです。

有事三法に反対し憲法を守り抜くため、どうかチラシを受け取って、有事法制とはどういうものか、まず中身を知って下さい。国民が有事法制で決められたことに反抗すれば罰則があることをご存じですか。地方自治体にも中央からの圧力が加わります。人間の生きる権利を奪いとるこれらの「戦時立法」を廃案に追い込みましょう。大変な時代を私たちは生きている。今でなければ、間に合いません。一緒に運動に参加してください。

民主主義を育てられなかった元教師として

千葉県議会議員 久保村礼子

働く女性と一緒に国会で問題になっている有事関連法を何とか廃案にしたい、その思いで呼びかけ人の一人になりました。

いま「武力攻撃の恐れ」とか、いろいろなことばが飛び交っていますが、どこから武力の攻撃があるのか。「有事」とはどんな事態をさすのか。わからないかたちで進められている。危険です。

今までのPKOにしても周辺事態法にしても、国会の審

議は九十時間以上なされたのに、この「有事」の審議はまだ三十時間くらいしかしてない。それなのに与党だけで公聴会の日程を決めてしまった。公聴会を開けばもう法案の採決ができる。こんないい加減なことで、私たち一人ひとりの生活にかかわってくる大事なことを決めていいのでしょうか。

私も戦争を経験した一人です。かつての太平洋戦争の前に関東大震災があり、その後昭和初期の恐慌、不況があった。それから七十年、阪神大震災があり、大変な不況になっている。だから戦争で不況を打開しようという考えもある。しかし、いまこの法案を通すことで、国家公務員、自治体も戦争に協力しなければならなくなる、私たちの財産も貢がなければならなくなる、何よりも大勢の人が死ぬ。

焼けた死体が累々ところがついていた光景が忘れられない私は、長い間教員をして、「教え子を再び戦場に送るな」のスローガンのもとで、子どもたち一人ひとりに自分で考える力をつけたいと思いながら教育実践してきた。しかし時の政府は戦争にふれる教師を排除し、戦争は授業の中でふれないできた。そして民主主義が育たなかった。私は自分の長い教師生活の中で教え子たちに本当に民主主義に相應しい授業をしてきたか、そのことをいま問われている気がします。その反省でマイクを握っています。

このまま黙っていたらどうなるかわからない。本当にそれでもいい。小泉内閣成立の時の国民のフィーバーぶりも、一人ひとりが本当に考えて小泉さんを支持していたのか。一つの大きな流れの中で巻き込まれた。そのことに不安になった。あれはファシズムの一里塚だったのではないか。そういう中でいまサッカーのワールド大会。日本中が燃えている時に、国会でスルツと通ってしまうのではないかと危機感を覚えています。

小泉は「備えあれば憂いなし」と言ってますが、備えをすることが周辺国にどんな影響を与えるのか、考えてほしい。韓国、朝鮮、中国、台湾の従軍慰安婦の方々に償いができないのに、またこんなことを始める。その方々が有事法がとおりそうだと聞いたらどんなに怒りを爆発させるか。周辺の国に様ざまな思惑を巻き起こしながら「戦争が起きる国」に突っ走っていくのか。考えましょう。行動しましょう。

軍隊は決して人民を守らない

新座市議会議員 星川 一恵

西銀座マリオン前、ここは戦後日本の平和の象徴。数寄屋橋は「君の名は」の場ですね、そこでいま「有事法制つ

て何だろう」と訴えています。

皆さん何だか本当によくわかんないですよ。私はそのことに危機感を持ちます。有事って何ですか。戦争じゃないか。戦争といわず「有事」というのは誤魔化しです。攻められたらどうするか、やっぱり準備しておいたほうがいいんじゃない。何となしにその程度に思っているだけじゃないのでしょうか。今の状態だと徴兵制になってもおかしくないと思います。戦後日本が何でこんなに繁栄してきたか。徴兵制もなければ軍隊もない中で、朝鮮戦争に協力したお陰で繁栄してきたんです。

今の日本は「攻められたら」という前提は考えられないと思います。誰が攻めてくるんですか。私たちが攻めて行っているんじゃないか。アフガンに空爆するアメリカの軍隊の手伝いに行ってるじゃないですか。私は「攻められること」より「自分たちが攻めること」のほうが、恐ろしいと思います。いつのまにかアメリカの後にくっついて戦争の手伝いをしている日本。そう感じてます。攻められても自衛隊は国民のことなんか守りませんよ。自分たちのことは守るかもしれないけれども、それなのに国民の権利を侵害する法律をつくろうとしているわけですね。

攻められたらどうする？ バンザイと白旗を掲げる。こ

れしかない。ましてや敵が近づいてくるわけではありません。現代の戦争は局地戦になりません。なんで有事法制をつくるのか。国民を飼ひ慣らししていくためですよ。小泉政権の人氣があるから今のうちにやっておかなければ、小泉が潰れたら他になかなかできないだろうと。言ってみれば為政者のスケジュールに従ってやっていているんじゃないか。

昔も三矢作戦というのがあった。「とんでもないことだ、平和憲法がありながらなぜそんなことを考えなければいけないのか、そういう作戦を考えてどんどん戦争状態に導いていくのはおかしい」と、何十年も前に葬り去られたのに、その三矢作戦を整理して、今がタイミングだと出したのが有事法制です。このタイミング、はずそうじゃないですか。

戦争なんていやだ。誰かが攻めてくるなんて、そんなことやらないために外務省があるんじゃないか。平和憲法に基づいて「日本は第九条があるので戦争はできません。貿易で立国している国なんです」とPRするのが日本の外務省の仕事じゃないですか。昔の日本社会党は「非武装中立」と言っていました、あれが正しいと思ってます。いまそんな時代じゃないと言う人がいますが、逆にそういう時代になったんじゃないでしょうか。沖縄でも、中国でも、日本の兵隊が住民を殺して、軍隊は人民を守らなかった。

そんな悲惨な事実を学んだ私たちであれば、攻めてきたらどうするなんて考えるの、やめようじゃないですか。その前にやるのがたくさんある。

平和外交すること、日本の憲法九条を輸出することが先だと思う。「備え」があれば「憂い」がでちゃう。絶対に小泉政権を倒さなければいけないし、有事法制も廃案にしなければいけない。今夜もデモがある。国会議事堂も近くにある、皆さん行こうじゃありませんか。悪法の極みをつぶすために、一諸に行動しましょう。

一つ一つ用意されて戦争になる

東京大空襲を記録する会 橋本代志子

空襲で両親と妹を失いました。最後に母と別れた橋の上で、私は赤ん坊を抱いて川に飛び込み、九死に一生を得ましたが、両親と妹は焼け死にました。それが戦争の姿です。二度と起こしてはいけません。再び繰り返してはいけません。それが私の平和運動の原点です。マリオンも私の若かりし頃は、日劇ダンシングチームで、とても楽しいところだったのに、空襲で燃えました。

再び戦争を起こしてはいけません。そのことを伝えようと、

空襲の資料センターをつくりました。そこで子どもたちに話をします。質問に立つ子どもが「おばさん、自衛隊は軍隊じゃないと言ってるけど、陸海空あって、あれは軍隊だね」って言うんですね。私は答えられません。「おばさんは軍隊だと思うよ。でも軍隊じゃないという人もいるよね」その程度のことしか子どもたちには言えません。でも「九条があります。九条があるから平和があります」と子どもに胸を張ってずつとずつと伝えたいと思っています。戦争は次の日すぐ戦争というものではないのです。一つひとつ戦争につながるものが用意され、戦争になる。あの時代、私たち女性には選挙権がなく、戦争を止めることができませんでした。そのことを考えると、いてもたってもいられません。私は家内工業の主婦で、忙しいのですが、来ずにはいられなくて今日は参加しました。二度と戦争のない世の中にしていききたいと思っています。皆さん力を合わせましょう。

憲法が死ねば私たちも死ぬ

日本消費者連盟 富山洋子

多くの方々がある事法制に反対するための話をしました。

有事法制って一体何なんだろう。その中身を十分に理解していない人も多いと思います。小泉首相は「備えあれば憂いなし。だから有事法制は必要だ」と。「備え」とは何か。「戦争をするための備え」です。しかし日本は憲法によつて戦争をしない、と高らかにうたっています。「戦争をするための軍隊を持たない」と九条に規定されています。有事法制を国会に提出することが、すでに憲法違反の行為です。自衛隊をつくつたり湾岸戦争でいわゆる多国籍軍に協力したり、PKO法を成立させ、それに基づいて自衛隊を海外派兵させてしまったことも憲法違反です。

そのうえ有事法制が成立すれば憲法は死んでしまいます。そうすれば生き生きとした暮らしも死んでしまうのです。戦争に協力しないと罪になる、人を殺さない罪になる、恐ろしい社会がやってくるのです。誰もが安心して暮らせる、老後の備えがあり、若い人に託せる社会をつくること、が、私たちの「備え」です。

武力攻撃事態法も、武力攻撃された時、攻撃のおそれがある場合、予測される場合など、定義があいまいな中で戦争をしようとしている。小泉の考えていることはアメリカと協力して戦争をすることです。「備え」のインチキさを多くの人に知らせていきましょう。私たちの「備え」は、

安心して生きられる「人間の安全保障」です。殺し殺される立場に追いやられる法案、命を脅かす法案に、絶対反対しましょう。

私たちが平和を世界の人びとと共有できる第一歩はこの法案を廃案にすることです。全国各地で運動をつくりだしましょう。有事法制の中身はとうてい受け入れられないものであることに、皆さん気づいてほしい。行動しましょう。

繰り返し運動して悪法を阻止しよう

司会 木瀬慶子

女性の力で法案を廃案にするために、そして子どもたちの未来のために、今こそがんばりましょう。明日では遅すぎる。緊急事態です。皆さん、職場で、地域で、有事法制

反対の大きな輪を広げてください。そして、この悪法を必ず阻止しましょう。みんなで、できるかぎりの力をつくしましょう。ありがとうございました。

*

「億当選」が何度も出たという近くの宝くじ売り場には、二重、三重の行列が続いていましたが、残念ながら、私たちの声に足を止める人はほとんどなく、三千枚のチラシを配ったとはいえ、拒絶する人も少なくありませんでした。私たちの声はどこまで届いたか、挫折感は何無とは言えませんが、私たちは挫折しません。拒絶されるからこそ続けます。さらに熱く、さらに良い方法を考えて。

全国各地からのメッセージと行動報告をお待ちしています。「有事」の対極の「平時」とは何か。次号も第二弾を送ります。(編集部 FAX 〇三―三三五四―九〇一四)

地球星のCDで 盛り立てましょう



14 ページに歌詞を掲載した「近藤日佐子さんの「地球星」のCDが、一枚千円で発売されています。街頭行動などで流すと効果的です。

●お申込は 九条連事務局

TEL & FAX 03-33779106 12へ

■有事法制を考えるⅠ

白いリボンは平和のマニフェスト

浮田 久子

みなさま、こんにちは。

戦後五〇年以上経っておりますが、その中で私は「一人の女」というより、「一人の人間」という意識が非常に強くて、一人の人間として生きて参りました。

小学校六年の時、日中戦争が起き、子ども時代を戦争と軍国主義の中で過ごしてきました。それから、波乱万丈の六〇年以上の年を過ごしてまいりましたから、皆さまとお話したいことがいっぱいあります。皆さま一緒に考えてくださるように、どこから始めようかなと考えましたが、結局、「今」から入ることにしました。昔のことを思い出して話すことも大切だけれど、「今」に向けて話したいと思いましたので。その意味での標題が「白いリボンは平和のマニフェスト」です。マニフェストなんて外国語は、ほんととは使いたくありません。でもすーっと胸におちるいい日本語を思いつけないので、使わせていただきます。

白いリボンをつけるのは、「私は平和の側に立ちます」という決心と覚悟をひとさまにはつきりと示すこと。また自分自身にもしっかり念押しする意味もあります。「白いリボン」から見えてきたもの、広がったことをお話ししたいと思います。

アメリカのパニックの中から生まれた白いリボン

今、こういう白いリボンをつけていますけど、このリボンは九月十八日から始めたのです。あの事故はは九月十一日。本当に悪夢のような、恐るべき非日常が日常の中に、パツと入ってきました。これは、他の国の人間にとっても一瞬、どう考えたらいいかわからないような、大事件でした。それはアメリカ人にとつてどんなものであったか、想像にあまりあることでした。

私は偶然に六月の初めから七月の最後までアメリカに行っていました。それというのは、うちの下の子は五四歳で、一番上の息子は六〇歳ですが、その子どもたちが、高校生のころ交換留学がありまして、アメリカの子どもたちを本当に家族の一員として迎え、家の子どもたちはアメリカに行き、それぞれ日常生活を共にして忘れたい思いをお互いにいたしました。その人たちが、その後、何回も日本の私どものところに帰ってきてくれました。

六〇年代、ベトナム戦争の頃に、彼らはベトナム反戦大学生でした。彼らは、アメリカのなかだけを見ているのではなく、日本に来て、日本の家族になって、本当に遠慮のない時間を過ごし、日本からネパールへ行ったりインドに行ったり、インドネシアに行つて、勉強したり、そういうふうにして、自分の人生を形成してきたということが、彼らの将来に非常に大きな影響を与えたであろうと思います。

たまたま、私の夫が一昨年亡くなりましたので、その交換留学生たちが、それでは、アメリカへ遊びにきてくれということで、昨年、彼らの家を訪問しながら歩いてきました。事故前のアメリカでしたけれど、アメリカがどういうふうになっているか、私たちと同じような日常の

生活を送っている人たちがどういうことを考えながら、どういうふうに生きているかというようなことが表面だけでなく、自然にわかったし、話し合いもできましたが、ブッシュが大統領になったということで、危機感を持つていました。そこへあの事件が起きたのです。

ニューヨークで働いている人もいましたから、私は翌朝その人たちに「どうでした」と電話をかけましたら、アメリカの様子は大変なものだ、と。空気の中に、恐怖と憎悪と怒りがぎっしり詰まっでいて、息をするのも苦しいくらいだ、という返事でした。私は、小さい時にアメリカで育ったこともございますし、何かとアメリカのことは知っておりますし、アメリカの人たちがああいう事件に遭遇したら、大げさではなく、正直そういうふうを考えるだろうということは非常によくわかりました。

ところが、アラブ人に対する憎悪とか恐怖から何の関係もない在留アラブ人たちが脅迫されたり、恐ろしくて家から出られない、殺された人もいる、一緒に歩いているアメリカ人までも暴行を受けた、というような状況になった。そういう中で、何人かの人たちがいち早くイサカの街でピースウォークを始めたのですね。ほんの二、三人から始めて、戦争反対、暴力反対というところで町の中を歩いていった。イサカはニューヨーク州、コーネル大学のある町です。

コーネル大学の中を歩くと、なぜか知らないけど白いリボンをつけた学生の数が、今日、明日、その次というふうに、どんどん増えていく。報復戦争反対の意思表示でした。若い人たちはやっぱり頼もしいんだということを話しましたが、アメリカ全体としては、恐怖とプライドを傷つけられたというか、自分たちこそ世界一の豊かな国である、安全な国である、という幻想が、あまりにも鮮やかに世界中の目の前で砕かれたことに対して、本当にほとんど狂気のようなった。

その中で、勇気を持って白いリボンをつけ、自分を取り戻し、平和を取り戻そうとしたのですね。私は戦後でさえも、平和を唱えるにはずいぶん妨害された覚えがありますので、一生懸命闘っている人たちを何とか支援してあげたい。「じゃあ、私たちの藤沢の町はイサカの町と同じように町の人たちが声をあげやすい町だから、白いリボンをつけて応援しましょう」ということで、呼びかけたのが十七日だったのです。

イサカから藤沢市に受け継がれた白いリボン

たまたまそのときに社民党の阿部知子さんの後援会の幹事会がございまして、その場で、その話をしたら、やりましよう、すぐリボンを買って、三百くらいのリボンを作って、チラシを作って、その翌日から市のサンパール広場に立ったのです。そうしたら、驚いたことに三〇分

四〇分でその三百枚のチラシがなくなってしまうました。それで皆、勇気を得ました。

四社くらいの新聞社がきてくれまして、このことを報道してくれたせいもあって、次の会合には、五〇人近い方がいらした。中には、本当に初めてお会いするような方がおられました。老若男女が集まったというか、女の人の平和運動にはあまり男の人は入ってこないのに、年をとられた男の方もたくさん来られました。その方がたはやっぱり戦中



の体験をしていらつしやるから、こんなことを黙って見ていられない、自分たちも連帯したいと、そういう形でリボンの運動は始まりました。

初めのうちは月に二回くらい、やっていました。やっているうちにいろんなことがわかってくるんですね。参加しなくてはいけないと思いつながら、ただ家の中で思い悩んでいるのではなく、街頭に立つて、チラシを皆に一枚一枚手渡していくという行動のなかから、私たちはいろんなことを学ぶことができたと思います。

私たちが心配していた報復戦争、アフガンへの空爆がついを開始されたちょうどその翌日、十月八日、私たちがリボンを街頭で呼びかけていますと、また大勢の方が、雨が降っておりまして、参加して下さいました。そんななかで、いろんなことが見えてきました。

「テロ」という言葉はやたらに使うまい

例えば、最初のチラシには「テロ絶対反対」と書いてあります。テロというのは、何なのだ。第三世界といわれているところでは、非常に搾取されて、独立したとは言うものの、自分たちの貧しさの犠牲において、「先進国の人びとが唱える平和」がある。「私たちの貧窮がなければ、あなた方の“平和”はないのだ。私たちは人間として生きるために闘う、レジスタンスをする。レジスタンスをすると、我われがやっているレジスタンスが、先進国の言葉に直されて「テロ」になる。テロは悪であると断罪される」という。そういうことであるならば、私たちは「テロ」という言葉を安易に使っていいだろうか、という声が出てくるようになりました。

これは一人や二人の人が気づいて言い出したのではなくて、チラシをまいて、いろんな情報をお互いに交換したり、現実の状況を見たりする中で、ああ本当だ、うっかりテロなんて言葉は使えない。じゃ、テロという言葉を使わないで別の言葉を使おうじゃないかということになって、私たちのスローガンの言葉も「いかなる戦争、暴力にも反対」という形に変わっていったわけです。こういうふうに、自分が自らチラシを配るという小さい行動一つの中でも、そういうことの気付きがありました。

アフガンの人びとは、普通の民衆です。報復爆撃の報道を聞きながら、私たちはあの太平洋戦争で大爆撃を受けて、ほとんど日本中のめぼしい所で、一晩に何万人から何十万人もの人が死んだ。沖縄ではもつとひどいことがあった。そういうことを思い出してまいりました。そのなまなましい体験から、私たち庶民にとつては、いかなる戦争も国民を守るためのものではありません。女子どもを守るための戦争なんてのは絶対ウソ、ということがわかってきました。そこから、私たちは、しぜん憲法のことも考えてきました。あの平和憲法が形骸化している。権力の座にある人びとが「もう時代遅れだ。アメリカから押しつけられた。日本にはなじまないものだ」などといって、私たちの平和憲法を骨抜きにしていることが、改めて見えてきたのです。

いま、アフガニスタンで行われていること、あれは、国と国との間の戦争つていえるのか、それへの日本政府の介入は……。これが平和憲法を国是としているはずの国の所業なのか。

私たちにとって、「報復戦争は不毛。憎しみは憎しみしか生み出さない。憎しみから平和が生まれるはずはない」というのは、ごく当たり前のことなのに、こんな当たり前のことが今の世界には通用しなくなっているのですね。去年の十一月頃だったか、炭疽菌という不気味な事件がア

メリカのあちこちで起きて、人びとは「アルカイダの仕業か」と、おののいたのですが、実は、「国内の不満分子が起こしたのでは」と、いう声も強くなりました。

炭疽菌事件はアメリカの出来事で、「日本には関係ない」と、大かたの日本人は思ったかも知れません。けれども実は、炭疽菌は、対中国戦争中に日本軍の七三一部隊が開発した細菌兵器の一つだったのです。日本の敗戦後、アメリカは、七三一部隊の資料を全部よこせば関係者を戦犯にしないという取引をして、その研究調査資料を持ち帰った。そういうものが基礎になってアメリカのABC兵器の開発が進んだこともわかってきました。戦争は人間を狂気にします。

たまたま白いリボンのお仲間のなかに、日本の戦争犯罪をずっと追及している方がいらしゃいます。七三一部隊が敗走するとき、例えば、毒ガスの砲弾を川の中に放り込んだり土中に埋めたりした。何十年もたって、中国人が堀を作ろうと穴を掘る。そこからこの爆弾が出てくる。鉄の塊のつもりで掘っているうちに、中から毒ガスが出てきて大勢の人が重傷を負い、亡くなった。これは日本がキチンと戦後処理をしていなかったため、と、日本に対して訴訟を起こした中国人を助けている方です。その方呼んで私たちは学習会を開きました。

私たちは、白いリボンをつけようと街で呼びかけながら、アフガニスタンへの募金をつのりました。そのお金をどのように届けたら、本当に困っている人の手に渡るだろうかと話し合いました。そのなかで、アフガニスタンに長年の間、医師として働いてこられた中村哲さんを知り、彼のベシヤワル会を通して、私たちの心も、共に届けていただくことにしました。中村さんは、衛生上でも最も必要な水を得るために、アフガニスタンの方がたと井戸掘りをしておられる。その仕事をしている一人がたまたま帰国して藤沢にみえたので、その方を招いてお話を聞きました。

その計画を聞いて大勢の人が集まり、その後もつながって運動をしています。

私たちは本当に普通の市民の集まりで、組織もなく、お金もないが、みんなで知恵を出し合って勉強したり、働いたりしています。その中で、『よみがえれカレーズ』（アフガニスタンで農地に水を引いてくる、伝統的な作業を復興しようと奮闘する人びとの記録）や、また、アメリカ軍が使用した「劣化ウラン弾」がもたらした、今日になっても続く、恐ろしい後遺症の実状を撮ったビデオなども見ました。このようにして、みんなで学ばなければ、ほんとうのことがわからないことを実感したのです。

例えばメディアです。メディアって何だろう。白いリボンの運動で、アメリカの友人たちと連絡を取り合ったりしていて気付いたことがあります。あの人びとは、あの大事件以来、アメリカ各地で反戦運動が立ち上がっているのに、お互い知らないでいるケースがあるのです。そのため、運動がつながらず、ベトナム戦争当時のような力を発揮できていないのです。情報が操作されている、日本の戦争中のことを思い出しました。しかし、現在はあの頃とはとても比較になりません。とにかく、孤立しないで、平和のために働こうとするとき、一般庶民の私たちも、ただパソコンを操作できるだけでなく、情報の現実について、もっと知らなければならぬと痛感しました。それで、ほかのグループが催されたエシユロンについての学習会にも出かけました。

また、私たちはイスラム文化を知らない。そういう自分の欠落している部分を何とかして補いたい、イスラム教徒に衣類を集めたりお金を集めて贈っている東京のモスクの方のお話を聞こうということで、これは、慶応の大学生と高校生など若い人たちが計画いたしました。でも自分たちだけでは人が集まるかどうかかわからないと言ってこられたので、じゃ、（白いリボン）も

一緒にやりましょうよ、と、このときも大勢お集まりになりました。

また、キリスト教徒がイスラム教のことを何にも知らないから、「イスラムは過激主義者だ、これが狂気と関係があるんじゃないか、非常に危険じゃないか」という誤解が生まれかねない。キリスト者がイスラム教についてもっと勉強する必要があるんじゃないかという意見が出て、教会にクレイシー・ハルーンさん（パキスタン人）をお招きしてお話を聞きました。

ジグソーパズルの一片をつなごう

私たちは小さい力ですが、何かやりだせば必ず反応があります。今の時代は、六〇年安保とか七〇年安保とは違った状況にあるから、庶民の私たちがそういう社会の中に出て行く。大げさな出方ではなくて、チラシを渡すところから始めれば、いろんなことが見えてくる。私たちは、平和の小さいジグソーパズルの一片ずつを手にもっています。それをテンデンバラバラ手に持っている限り、平和のための志、平和のための思いが、何の力にもならない。お互いに、どこで私の一片とあなたの一片が合うだろうかということを考えながら、そのパズルをだんだんつなげていくと、知らないうちに、大きな平和の土台ができていくのではないか。個人が持つ力が意外に大きいということも感じました。

六〇年安保、七〇年安保の頃は、まだまだ、「個人なんか」という思いが強かったですね。でも、団体でやることにも限度がある。ここまで追い詰められてまいりますと、いよいよ、一人の持っている力が再認識されてくる。その一人ひとりとはみんな生活の仕方も違うし、価値観も違

ますから、そう簡単に手を結ぶことはできません。それでも、人類が、人間が、ここまで追い詰められてしまうと、一緒に力を合わせなくては未来がなくなってしまうのです。この際、お互いが、力を合わせることを学ぶ。実践する。自分たちでまず出来ることからスタートするのです。

「平和教育」という新しい試み

ながいこと「平和研究」という場で、平和教育と向き合ってきて、平和教育とは何も特別な教育ではないのだ。普通の当たり前の教育が平和教育でなければならないのだと考えるようになりました。国際の場で、先進国からきた人、第三、第四世界といわれる国からきた人と、戦争について、平和について、何より平和不在状況について、平和教育とは、結局、真人間が育つ、そういうものでなければならぬのだ。そんなことも思いながらPTA活動をしてきました。

自分の子どもたちが巣立って、あと三男が連れ合いを亡くしました。それで、私が孫のPTAに出てみました。私の子どもの頃のPTAでは、父母も先生も社会的なことにも目を向けて、一九五五年、ビキニの水爆実験のあとには原水禁の安田先生なども招いてお話を聞いたものです。十五、六年もたって、孫のPTAに行きました。お祖母ちゃんだから、あまり喋るのも遠慮していたんですけど、何かのことで、「これはこういうふうに直したほうがいいんじゃないか」と、意見を出して、PTAの会合に行きましたら、会長が「お一人の発言だから、総会には出さない」。他のPTAのクラス委員の方も「そうですね」と、軽く葬られました。私はびっくりして、私が関わった頃のPTAと違うなと思いました。これからずっと、もっともっと、本当

の意味の民主化が進んでいくと思っていたのに、びっくり。あとで聞いてみたら、先生もお母さんの言うことを聞かないようにしているし、お母さんも自分の子どものことばかり考えている。だから、PTAがだんだん後退し、変質してきたのだ、と、わかりました。

そういう意味で、もっと驚いたことがあります。私は家で英語の塾をやっていたことがありました。家のそばの中学校の子どもたちが夏休みに丹沢にみんなで行ったんです。ところが、雨が降って雷が鳴り出したのでどこかに避難して一晩帰らなかった。ちょうどその翌日に、私のところに子どもたちが来ました。その日の夕方、山に行った子どもたちが無事に帰ったと聞いて、その子たちが「がっかりした」と言うんです。「どうしてがっかりしたのか」と聞いたら、「湘南高校の競争相手があれで減るかと思った」と。本当にびっくりしました。子どもですよ。普通の中学生。私は息を呑む思いだったんですけど、PTA活動の衰退の中で、そういう子どもが育ってきている。そのことをみんなが気がつかなければ、と思いました。家の子がちょうど大学生になっていたんですけど、その話を聞いて、「おふくろさん、平和教育なんて言っているけど、今、日本の中で一番抑圧されているのは子どもなんだ。PTAで平和運動やっている人にも子どもがいるんだろうけど、一番抑圧されているのは子どもなんだということを忘れないでよ」と言ったんですね。私も本当にそうだなと思いました。

有事立法で、戦前に一挙に戻る

今年になって有事立法がにわかに脚光をあびるようになりました。調べれば、調べるほど恐ろ

しくなりました。あの戦前の時代に一挙に逆戻りするという、悪夢が現実のものになる。あの法律の立案者のなかに当時の状況を覚えている人がいないのではないか。有事三法は、当時の国家総動員法や治安維持法をすぐ思い起こさせます。とにかくも平和憲法のもとで生きてきた私たちにはあまりにも支離滅裂、私たち庶民にとっては、すべて霧の中で、不安をかりたてられるばかりです。

平和の白いリボン運動は、四月頃からこの法制反対のために全力を尽くしています、他の市民団体と手を結んで「有事法制に反対する神奈川キャンペーン」運動を始めました。

四月二一日付で、神奈川県下の全市町村長宛てに「質問書」を送り、五月二四日現在、三八自治体中、三十の自治体から回答を貰いました。この件については、ただ質問書を作るだけでなく、私たちが手分けをして、各自治体を訪ね、直接話し合いをする方法をとっています。そして、その結果は公表することにしました。このような直接行動は、相手ばかりでなく、参加する私たち自身にも役立つところが大きいものです。今後も続けていきたいと思っています。

「五月三日、藤沢市民活動推進センターで。主催・大浅田敦子（あこら湘南事務局） 後援・エフの会（藤沢女性問題を考える会） 運営・AIR（安藤インターレジデント）による講演会から抄録」

◆浮田久子さんは、〈カトリック正義と平和協議会〉会員、〈婦人国際平和自由連盟日本支部〉会員（元副会長）、〈日本平和学会〉会員（元副会長）。八十を過ぎた今も、有事法制反対のため、連日、各地の行動の先頭に立っておられます。

■有事法制を考えるⅡ

軍隊を捨てた国、コスタリカに学ぶ

池田 眞規

はじめに

日本法律家協会は、軍隊をすてた国、自然保護の先進国であるコスタリカを二〇〇〇年九月に訪問した。軍隊の廃止を宣言したフイゲレス元大統領の夫人カレン女史、ヴォルガス国際反核法律家協会副会長（国際法学者）と前後六時間にわたり対談した。

「軍隊は要らない」という考え方を共有する

カレン女史は私たちを歓迎昼食会に招き、私たちの訪問に対し、「私が非常に感動しておりますのは、皆様方がこの小さい国コスタリカと同じに、軍隊を持つ必要がないという考え方をもっているに似ている、ということです。コスタリカは、軍隊は要らないという考え方をみんなが共有している国でございます」とさりげなく語り始めたのに、まず、えらい国にやってきたものだと思った。

彼女自身、国連大使、イスラエル大使、中米大使などを歴任した政治家である。一九四八年、

大統領選挙の不正に端を発し、彼女の夫が率いる野党（民主党・社会民主党連合）が武装蜂起し政権を奪取する。そして彼は「軍隊はしばしば国民を弾圧するために使われてきたが、我々は今後対話による解決を選ぶ。軍隊はもういらぬ」と常備軍廃止を宣言する。現在まで、五一年間政府は一貫して非武装政策を継続し、国民は政府の非武装政策を支持し、これを誇りにしてきた。

紛争を解決するのに、人を殺さないで解決する方法はないのか

カレン女史やヴァルガス氏の話を要約すると次のようだ。コスタリカの人びとは伝統的に自由な議論をしてきた。地方と都市の人びととの富の格差の不公平は正などに費用が必要なのに、戦争に費用をかけることにどのような意味があるのか。むしろ、紛争を解決するのに軍隊による戦争によらないで、つまり人を殺さない方法で解決する方法はないのか。それには対等な対話・会談・和解、国際管理や軍縮など、いろいろな方法が考えられるではないか、などと、早い時期から長い間考えてきたという。フィゲレスの率いる武装蜂起は、夢をもった若者らに支えられて成功した。常備軍廃止は彼らのかねてからの議論の延長線上のものであった、というのである。

未来主義、夢に向かって「終わりなき戦い」

カレン女史は、度々「未来主義」という言葉を使う。また、「終わりなき戦い」という言葉も使う。

彼女によれば、この考えは常に夢を持ち、夢に向かって前進・発展することであり、前進・発展は技術や経済の発展・成長だけを考えるのは間違っている。

発展というのは、平和を目指すもの、人間あるいは人類の前進・成長と考えなければならぬ。それは人間の生命を基礎にして、常に今より良い社会を実現するという夢に向かって「終わりなき前進」をすることだという。

彼らは「命を大事にすること」が基本であると考えている。コスタリカの政治家らは、この考えを国政の基本に適用しているようだ。軍隊による武力行使は「人間を殺し、すべてを破壊すること」であり、人間にとって前進・発展ではない。国家間の、また国内における政府と国民の間の、意見の違いから生ずる紛争を、武力による「殺戮と破壊」によらない方法で解決することが、人間・人類にとつての「発展・成長」である、と考える。

例えば、人の命が大事。だから、犯罪人の命も大事だから死刑廃止。難民の命も大事だから無制限に難民を引き受ける。現在の難民の数は人口三五〇万人の二〇%にも及んで苦しんでいるが、難民を追い返すことをしない。日本が昨年一年間で難民と認定し入国を認めたのは確か二二名であるのに比べると信じられない「寛容性」である。

単純で分かりやすいが、これを政治の場に適用することに何ら躊躇することがないのが凄いとこである。

こうして、あたり前のことが、国政の中で実現されてゆくのである。そしてその前進は止まらない。コスタリカには、まだまだ解決すべき問題は山ほどある。これからも夢に向かって「終わりなき戦い」は続くのである。

軍隊を廃止しても国家は安全に存続する

軍隊を廃止したコスタリカは、半世紀以上も外敵の軍事侵略による国土占領をされたことがない。軍隊がなくても国家は安全に存続できることをコスタリカは証明している。コスタリカ国民は政府の非武装政策を信頼している。この信頼は、外敵の軍事侵略の脅威を国民が心配していないことでもある。

私たちが自然保護地区モンテベルデに行ったときのバスガイドのコスタリカ青年は、コスタリカの紹介の中で「コスタリカ人の誇りは二つあります。一つは軍隊がないこと、もう一つは自然が保護されていることです」と誇らしげに喋っていた。こちらから「外国から侵略されたらどうするの」と尋ねると「攻めてこないよ」と、のんきな返事で笑っていた。外国の侵略など心配していないのである。

非武装コスタリカはなぜ侵略されないのか

コスタリカに対して、なぜ他国は軍事侵攻をしなかったのか、またできなかったのか。実施された国内・国際政治の実際をみると、次のように説明できる。

コスタリカ政府が「軍備を廃止しても外敵の侵略を受けない方法」として採用した政策は、積極的方法と消極的方法との両面を考えていたようである。

1. 積極的非武装中立で国家の安全が保証されることを証明

積極的方法としては、積極的非武装中立・仲裁外交を多面的に展開したことである。つまり地域の集団安全保障機構である米州機構に「軍事協力はできないことを条件」として加盟し、また米州相互援助条約（リオ条約）に加盟して、外国の軍事侵略に対し、集団安全保障機構を有効に利用する方針に徹していたこと。また他の国において軍事的紛争が発生したときは、コスタリカの大統領や大使が紛争当事国あるいは内戦の政府軍の双方に対して積極的に仲裁役を買って出るという仲裁外交を展開したこと。また他国の内戦により生じた避難民や亡命者に対しては「コスタリカ領土は政治的理由で迫害を受けているすべての避難所である」（憲法三一条）という考え方によって、迫害を受けた者や難民を受け入れることなど、平和に向けた積極的な対外政策を実行し、それによって近隣諸国の信頼を得て、自国との紛争の原因を作らない外交姿勢に徹したことである。

しかし一九八〇年に入り、隣国ニカラグアの内戦で反政府軍及びこれを支援する米国によって、コスタリカ領土が米国により軍事利用される危機が迫ったとき、時の大統領モンヘは、世界に向けて「いかなる武力紛争に対してもコスタリカは中立である」と永世非武装中立の宣言を発表し、各国政府に対し支持を求めたのである。

これを事前に察知した米国政府は密使を派遣し、大統領が宣言をしないように圧力をかけたが、大統領はこれを拒否し、この中立宣言によって軍事的危機は脱した。

このような積極外交による中米地域の平和への貢献によって、モンヘの後を次いだアリアス大

統領は一九八九年にノーベル平和賞を受賞する。これらの積極外交は周辺諸国からは平和国家としての信頼を受けることになり、軍事侵攻を受ける危機を自国の政治的な努力によって、事前に除去してきたのである。コスタリカのこれらの積極的な真の平和外交は、軍備によらないで国家の安全を維持する有効な方法があり、それが成功していることを証明することになった。

2. 選挙制度の徹底した改革で公正な政府を実現

次に軍事侵攻を防止する消極的方法として、コスタリカの人びとは「民主主義国家を建設すること」であると考えた。

そのためには第一に国の政治の民主的制度化を徹底すること、第二に国民に非武装の平和教育を徹底すること、この二つを完成することによって、コスタリカという国は他国に対して軍事侵略を絶対にしない、つまり侵略者にはならない国であり、信頼できる国であることを周辺の他国に対し保障をすることになると考えたのである。

これは極めて高いレベルの国民の信頼を得た政治家の発想である。日本の国会の惨状とは比較しようもない。

その具体的な方法として、フィゲレス革命後に着手したのが選挙制度の徹底した民主化である。国政の民主化の第一は選挙制度を清潔にすることが先決だと考える。

その方法として、選挙はすべて、立法（国会）・行政・司法の三権からも完全に独立した第四権の、常設の「選挙管理裁判所」が管理することにした。この発想は近代憲法学の通説である三

権分立を超える徹底した民主主義である。この選挙管理裁判所は、国会からの、政府（内閣）からの、司法からの、選挙に対する干渉から独立した権力機関である。この権力機関に、国民の民意を正しく国政に反映させる清潔な選挙を実施する権限と責任を持たせたのである。

選挙権の登録、投票用紙の配布、全国の投票所との連絡、投票の集計と当選者の発表、政党の演説会への聴衆の交通の障害の排除を警察に指示する（臨時に投票日までの三か月は裁判所が警察権を行使できる）など、国民の自由な投票権の行使を保障するすべての事項を管理し、当選者の発表も選挙管理裁判所が行うという徹底したものである。選挙は国政の最大の重要な行事であるとの認識が行きわたり、投票日は全国民のお祭りとなる。

権力の座に長く居座ると、政治は腐敗するという理由から大統領の再選は禁止である。国会議員（定員五七名の一院制）の定数は、二年毎に行われる各選挙区の人口調査により是正され、比例代表制であり、一院制である。

国会議員は連続して二回の立候補は許されない。選挙運動については、他の候補者や政党への誹謗中傷が禁止されるほかは、投票の呼びかけや依頼（これは選挙運動ではなく表現の自由なのだ）、文書の配布、戸別訪問などの運動に制限はない。選挙は国民的な重要な行事であるので小学校の生徒も選挙の訓練のために模擬投票を行い、その投票結果も発表する。国民は、どの候補者が国家社会に貢献する政治家であるかを、干渉のない環境の中で自分で判断して投票をする。

こうして、選挙から利権、買収、汚職、情実などを排除して、公正にして清潔な選挙の実施を保証した。

国民の存在を忘れて党利党略の選挙法の改悪に明け暮れる日本の現状は、情けない限りである。

ところが、日本コスタリカ友好議員連盟の会長が森喜朗前首相であることは一体どう理解したらいいのだろうか。

清潔な選挙制度は、国政のすべてに民主主義的な制度を確立することの大前提である。このような公正な選挙で選ばれた大統領や国会議員は、「軍隊は必要がない」という考え方に基づく政治を、国民の支持を受けて大胆に実行し、戦争をしない平和国家の発展のために対話を重ねて叡智を傾けることができる。

コスタリカは、軍隊を廃止したために、軍事予算（国家予算の三分の一）を教育費と社会保障に充当し得た。この結果、識字率は九七％、中南米諸国で最も高い識字率となった。国民所得も最も高くなり、義務教育の九年間は無償となった。

そして、国連平和大学や米州機構の人権裁判所などを誘致したのである。

「そんな爆弾を誰が何のために落としたの」

カレン女史は、「わが国で最も重要なものは教育です」と強調する。コスタリカでは「軍隊が必要がない」という考え方を国民が共有するためには、子どもの学校教育が重要であると考えたのである。

私たちは、小学校の教育の現場を見学した。訪問したのは、サンホセの貧困層、ニカラグアなどから難民などの居住する地域にあるリンコングランデ小学校である。ここでの教育は衝撃的であった。子どもの教育の目標は、事実を批判的に見る子、創造力のある子、他人に優しい子、平

和を求める子を育てることである。

授業はその理念を創造的に実践する場である。私たちが見学した、あるクラスの授業では「水について考える」というテーマで議論をしていた。水がさまざまな循環をする、これが汚染するとうなるか。環境問題にまで及んだ水の大切さを子どもに考えさせるのが今日の授業の目的だという。

見学した最後の教室では、私たちと児童が対話することになった。原爆の教室では、私たちの訪問団に原爆の被爆者がいたので、被爆体験を少し語ることになった。彼らにとつて被爆者との出会いは初めてである。真剣な眼差しで聞いていたが、終わってからの彼らの質問は、「そのような爆弾を誰が、何のために落としたのか」「放射能というのは、なぜいつまでも体の中にいるのか」「私たちは何をしたらいいのか」など、小学生の質問とは思えないものであった。子どもらに対する創造性に満ちた平和教育の実状を目の当たりにしたのである。

「命^{めい}どう宝」 Ⅱ 人権とは、「命を大事にすること」

「殺し合いをしない」ことは「命を大事にする」考え方である。カレン女史は人権という言葉をはほとんど使わないで「命が大事です」という。これがコストリカの政治の基本理念であり、教育の基本理念である。沖縄の人びとが「命^{めい}どう宝」というのと期せずして一致している。かつての琉球王国は今のコストリカだったのである。

コスタリカで学んだこと

コスタリカ訪問は正味三日間であった。この短い時間に言葉に尽くせないほど豊富な事実と考え方を与えられた。

私たちは、少なくとも、国家が軍隊を放棄して、清潔な選挙制度のもとで民主主義国家を建設し、平和教育を実施し、積極的な平和外交をすれば、その国は諸国民の信頼と尊敬を受け、他国の侵略を受けることなく、国民は平和のうちに生存できる、ということを確認することができた。そこには日本国憲法の理念を忠実に実現した国が存在していたのである。

日本国憲法の理念は、実現できない夢ではない、ということを学ぶことができたことを、ここに確信をもってご報告する。

(いけだ まさのり 日本反核法律家協会副会長・弁護士)

コスタリカ報告集

～2002年1月～2月平和視察団のみなさんへ～



市民、弁護士、学者たち23人による視察団がまとめた報告集。コスタリカの平和、民主主義、人権保障、教育の各分野ごとに事実を忠実に拾い、考察を加えた最新情報を満載。A4判・230ページ。購入ご希望の方は、住所、連絡先、必要部数を書いて、FAXで左記にお申し込みください。 ● 定価1000円

■ 申込先

城北法律事務所(豊島区西池袋1-17-10-6)
FAX 03(3986)9018 大山勇一宛

沖繩密約と個人情報保護法案

土江真樹子

(琉球朝日放送 報道部 ディレクター)

「沈黙の三〇年は本当に長かったです」

私の目を見つめて西山啓子さんは一言、はつきりと言った。西山啓子さんは元毎日新聞記者、西山太吉氏の妻。西山太吉と言う名前に沖縄返還の交渉や三〇年前の事件、「外務省機密漏洩事件」を思い起こす人たちは少なくなつた。

沖縄の返還交渉時に日米両政府が結んだ密約の一つに「対米請求権の肩代わり」があつた。二七年間の統治時代に接收した土地や人身事故の損害賠償を、米国が沖縄の人たちに「自発的に」支払うと見せかけて、実は、日本政府がその費用を支払うという裏取引である。この密約を新聞で暴露したのが西山太吉氏だった。経過は複雑で長くなるから省くが、結果、西山氏は外務省機密文書を女性職員から入手したことから問題は男女のスキヤンダルへとすりかえられた。西山氏は文書を持ち出した女性を「そそのかした」と国家公務員法違反の罪で有罪判決を受けた。

この事件を考えると、私はもう一人の男性を思う。ベトナム戦争の文書を持ち出しアメリカの有力紙に掲載しようとしたダニエル・エルズバーグ氏である。エルズバーグ氏は西山氏の逮捕から五日後に出頭。裁判の結果、無罪判決となつた。国家の脅しにも屈しなかつた新聞の後押しもあつたが、同時期の二人を取り囲む環境と判決はあまりにも違う。

この問題をもう一度考えて欲しい。

なぜこの事件が「沖縄返還交渉密約事件」ではなく「外務省機密漏洩事件」だったのか。問題は密約であり、漏洩ではなかつたはずだ。

なぜ真実を報道しようとした記者が有罪となり、三〇年間も口を閉ざしたのか。彼の報道は国家の密約を暴き、沖縄の人たちへの裏切りを告発したものだ。しかし結果は責任を追及されるべき政府はいつのまにか追求の手から逃れ、一組の男女のプライベートルームな問題だけが残った。メディアも最初は「国民の知る権利」を主張していたはずだったが。

なぜこの職員は「そそのかされた」被害者となったのか。

女性はいつも利用される被害者。男性は利用者、という図式。裏切った男性への復讐が、保身か。彼女は流されていったのか。それによつて世論は西山氏だけでなく彼女の身辺も根こそぎひっくり返し、荒らしていった。彼女は何かを得ることができたのか。その後、彼女がどのような人生を過ごしたのか。私にはわからない。

三〇年前、メディアは多くを学んだはずだ。学ばなければならない。真実の告発は守られなければならない。今審議されている個人情報保護法案の背後にこの事件の影が見え隠れする。これらの法案はどのような性質のものなのか、考える必要がある。

「三〇年は長うございました」

告発の被害者を生み出さないためにも。

（編集部注・土江さんは、三〇年前、私たちが「逆見さん事件」として告発し運動したこの事件を、『告発』というドキュメンタリーに制作。五月十五日、沖縄返還三〇周年記念日に琉球朝日放送から一時間番組で、また五月十二日〜十八日に全国の朝日放送から三十分番組として放映され、深い感動で話題になりました。）

有事法制関連三法案条文

【資料1】

武力攻撃事態における国の平和と独立並びに国民の安全の確保に関する法律案（全文）

目次

第一章 総則（第一条―第八条）

第二章 武力攻撃事態への対処のための手続き等（第九条―第二十条）

第三章 武力攻撃事態への対処に関する法制の整備（第二十一条―第二十三条）

第四章 補則（第二十四条）

付則

第一章 総則

（目的）

第一条 この法律は、武力攻撃事態への対処について、基本理念、国、地方公共団体等の責務、国民の協力その他の基本となる事項を定めることにより、武力攻撃事態への対処のための態勢を整備し、併せて武力攻撃事態への対処に必要となる法制の整備に関する事項を定め、もって我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保に資することを目的とする。

（定義）

第二条 この法律において、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 武力攻撃 我が国に対する外部からの武力攻撃をいう。
- 二 武力攻撃事態 武力攻撃（武力攻撃のおそれのある場合を含む）が発生した事態または事態が緊迫し、武力攻撃が予測されるに至った事態をいう。

三 指定行政機関 次に掲げる機関で政令で定めるものを

いう。

イ 内閣府、宮内庁並びに内閣府設置法（平成十一年法律第八十九号）第四十九条第一項及び第二項に規定する機関並びに国家行政組織法（昭和二十三年法律第二百十号）第三条第二項に規定する機関

ロ 内閣府設置法第三十七条及び第五十四条並びに宮内庁法（昭和二十二年法律第七十号）第十六条第一項並びに国家行政組織法第八条に規定する機関

ハ 内閣府設置法第三十九条及び第五十五条並びに宮内庁法第十六条第二項並びに国家行政組織法第八条の二に規定する機関

ニ 内閣府設置法第四十条及び第五十六条並びに国家行政組織法第八条の三に規定する機関

四 指定地方行政機関 指定行政機関の地方支分部局（内閣府設置法第四十三条及び第五十七条（宮内庁法第十八条第一項において準用する場合を含む）並びに宮内庁法第十七条第一項並びに国家行政組織法第九条の地方支分部局をいう）その他の国の地方行政機関で、政令で定めるものをいう。

五 指定公共機関 独立行政法人（独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三十三号）第二条第一項に規定する独立行政法人をいう）、日本銀行、日本赤十字社、日本放送協会その

他の公共的機関及び電気、ガス、輸送、通信その他の公益的事業を営む法人で、政令で定めるものをいう。

六 対処措置 第九条第一項の対処基本方針が定められてから廃止されるまでの間に、指定行政機関、地方公共団体または指定公共機関が法律の規定に基づいて実施する次に掲げる措置をいう。

イ 武力攻撃事態を終結させるために実施する次に掲げる措置

（一） 武力攻撃を排除するために必要な自衛隊が実施する武力の行使、部隊等の展開その他の行動

（二） （一）に掲げる自衛隊の行動及びアメリカ合衆国の軍隊が実施する日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約（以下「日米安保条約」という）に従って武力攻撃を排除するために必要な行動が円滑かつ効果的に行われるために実施する物品、施設または役務の提供その他の措置

（三） （一）及び（二）に掲げるもののほか、外交上の措置その他の措置

ロ 武力攻撃から国民の生命、身体及び財産を保護するため、または武力攻撃が国民生活及び国民経済に影響を及ぼす場合において当該影響が最小となるようにするために実施する次に掲げる措置

(1) 警報の発令、避難の指示、被災者の救助、施設及び設備の応急の復旧その他の措置

(2) 生活関連物資等の価格安定、配分その他の措置

(武力攻撃事態への対処に関する基本理念)

第三条 武力攻撃事態への対処においては、国、地方公共団体及び指定公共機関が、国民の協力を得つつ、相互に連携協力し、万全の措置が講じられなければならない。

2 事態が緊迫し、武力攻撃が予測されるに至った事態においては、武力攻撃の発生が回避されるようにしなければならない。

3 武力攻撃が発生した事態においては、武力攻撃を排除しつつ、その速やかな終結を図らなければならない。この場合において、武力の行使は、事態に応じ合理的に必要と判断される限度においてなされなければならない。

4 武力攻撃事態への対処においては、日本国憲法の保障する国民の自由と権利が尊重されなければならない。これに制限が加えられる場合は、その制限は武力攻撃事態に対処するため必要最小限のものであり、かつ、公正かつ適正な手続きの下に行われなければならない。

5 武力攻撃事態への対処においては、日米安保条約に基づいてアメリカ合衆国と緊密に協力しつつ、国際連合をはじめと

する国際社会の理解及び協調的行動が得られるようにしなければならない。

(国の責務)

第四条 国は、我が国の平和と独立を守り、国及び国民の安全を保つため、武力攻撃事態において、我が国を防衛し、国土並びに国民の生命、身体及び財産を保護する固有の使命を有することから、前条の基本理念にのっとり、組織及び機能のすべてを挙げて、武力攻撃事態に対処するとともに、国全体として万全の措置が講じられるようにする責務を有する。

(地方公共団体の責務)

第五条 地方公共団体は、当該地方公共団体の地域並びに当該地方公共団体の住民の生命、身体及び財産を保護する使命を有することにかんがみ、国及び他の地方公共団体その他の機関と相互に協力し、武力攻撃事態への対処に関し、必要な措置を実施する責務を有する。

(指定公共機関の責務)

第六条 指定公共機関は、国及び地方公共団体その他の機関と相互に協力し、武力攻撃事態への対処に関し、その業務について、必要な措置を実施する責務を有する。

(国と地方公共団体との役割分担)

第七条 武力攻撃事態への対処の性格にかんがみ、国におい

ては武力攻撃事態への対処に関する主要な役割を担い、地方公共団体においては武力攻撃事態における当該地方公共団体の住民の生命、身体及び財産の保護に関して、国の方針に基づく措置の実施その他適切な役割を担うことを基本とするものとする。

(国民の協力)

第八条 国民は、国及び国民の安全を確保することの重要性にかんがみ、指定行政機関、地方公共団体または指定公共機関が対処措置を実施する際は、必要な協力をするよう努めるものとする。

第二章 武力攻撃事態への対処のための手続き等

(対処基本方針)

第九条 政府は、武力攻撃事態に至ったときは、武力攻撃事態への対処に関する基本的な方針(以下「対処基本方針」という)を定めるものとする。

2 対処基本方針に定める事項は、次のとおりとする。

- 一 武力攻撃事態の認定
- 二 武力攻撃事態への対処に関する全般的な方針
- 三 対処措置に関する重要事項

3 対処基本方針には、前項第三号に定める事項として、次に掲げる内閣総理大臣の承認を行う場合はその旨を記載しなければならない。

一 防衛庁長官が自衛隊法(昭和二十九年法律第百六十五号)第七十条第一項または第八項の規定に基づき発する同条第一項第一号に定める防衛召集命令書による防衛召集命令に関して同項または同条第八項の規定により内閣総理大臣が行う承認

二 防衛庁長官が自衛隊法第七十五条の四第一項または第六項の規定に基づき発する同条第一項第一号に定める防衛召集命令書による防衛召集命令に関して同項または同条第六項の規定により内閣総理大臣が行う承認

三 防衛庁長官が自衛隊法第七十七条の規定に基づき発する防衛出動待機命令に関して同条の規定により内閣総理大臣が行う承認

四 防衛庁長官が自衛隊法第七十七条の二の規定に基づき命ずる防衛施設構築の措置に関して同条の規定により内閣総理大臣が行う承認

4 対処基本方針には、前項に定めるもののほか、第二項第三号に定める事項として、第一号に掲げる内閣総理大臣が行う国会の承認(衆議院が解散されているときは、日本国憲法第

五十四条に規定する緊急集会による参議院の承認。以下この

条において同じ)の求めを行う場合にあってはその旨を、内閣総理大臣が第二号に掲げる防衛出動を命ずる場合にあってはその旨を記載しなければならない。ただし、同号に掲げる防衛出動を命ずる旨の記載は、特に緊急の必要があり事前に国会の承認を得るいとまがない場合でなければ、することができない。

一 内閣総理大臣が防衛出動を命ずることについての自衛隊法第七十六条第一項の規定に基づく国会の承認の求め

二 自衛隊法第七十六条第一項の規定に基づき内閣総理大臣が命ずる防衛出動

5 内閣総理大臣は、対処基本方針の案を作成し、閣議の決定を求めなければならない。

6 内閣総理大臣は、前項の閣議の決定があつたときは、直ちに、対処基本方針(第四項第一号に規定する国会の承認の求めに関する部分を除く)につき、国会の承認を求めなければならない。

7 内閣総理大臣は、第五項の閣議の決定があつたときは、直ちに、対処基本方針を公示してその周知を図らなければならない。

8 内閣総理大臣は、第六項の規定に基づく対処基本方針の承認があつたときは、直ちに、その旨を公示しなければならない

ない。

9 第四項第一号に規定する防衛出動を命ずることについての承認の求めに係る国会の承認が得られたときは、対処基本方針を変更して、これに当該承認に係る防衛出動を命ずる旨を記載するものとする。

10 第六項の規定に基づく対処基本方針の承認の求めに対し、不承認の議決があつたときは、当該議決に係る対処措置は速やかに、終了されなければならない。この場合において、内閣総理大臣は、第四項第二号に規定する防衛出動を命じた自衛隊については、直ちに撤収を命じなければならない。

11 内閣総理大臣は、対処措置を実施するに当たり、対処基本方針に基づいて、内閣を代表して行政各部を指揮監督する。

12 第五項から第八項まで及び第十項の規定は、対処基本方針の変更について準用する。ただし、第九項の規定に基づく変更及び対処措置を構成する措置の終了と内容とする変更については、第六項、第八項及び第十項の規定は、この限りでない。

13 内閣総理大臣は、対処措置を実施する必要がなくなつたと認めるときは、対処基本方針の廃止につき、閣議の決定を求めなければならない。

14 内閣総理大臣は、前項の閣議の決定があつたときは、速

やかに、対処基本方針が廃止された旨及び対処基本方針に定める対処措置の結果を国会に報告するとともに、これを公示しなければならない。

(対策本部の設置)

第十条 内閣総理大臣は、対処基本方針が定められたときは、当該対処基本方針に係る対処措置の実施を推進するため内閣法(昭和二十二年法律第五号)第十二条第四項の規定にかかわらず、閣議にかけて、臨時に内閣に武力攻撃事態対策本部(以下「対策本部」という)を設置するものとする。

2 内閣総理大臣は、対策本部を置いたときは、当該対策本部の名称並びに設置の場所及び期間を国会に報告するとともに、これを公示しなければならない。

(対策本部の組織)

第十一条 対策本部の長は、武力攻撃事態対策本部長(以下「対策本部長」という)とし、内閣総理大臣(内閣総理大臣に事故があるときは、そのあらかじめ指名する国務大臣)をもつて充てる。

2 対策本部長は、対策本部の事務を総括し、所部の職員を指揮監督する。

3 対策本部に、武力攻撃事態対策副本部長(以下「対策副本部長」という)、武力攻撃事態対策本部員(以下「対策本部

員」という)その他の職員を置く。

4 対策副本部長は、国務大臣をもつて充てる。

5 対策副本部長は、対策本部長を助け、対策本部長に事故があるときは、その職務を代理する。対策副本部長が二人以上置かれている場合にあっては、あらかじめ対策本部長が定めた順序で、その職務を代理する。

6 対策本部員は、対策本部長及び対策副本部長以外のすべての国務大臣をもつて充てる。この場合において、国務大臣が不在のときは、そのあらかじめ指名する副大臣(内閣官房副長官または法律で国務大臣をもつてその長に充てることと定められている各庁の副長官を含む)がその職務を代行することができる。

7 対策副本部長及び対策本部員以外の対策本部の職員は、内閣官房の職員、指定行政機関の長(国務大臣を除く)その他の職員または関係する指定地方行政機関の長その他の職員のうちから、内閣総理大臣が任命する。

(対策本部の所掌事務)

第十二条 対策本部は、次に掲げる事務をつかさどる。

一 指定行政機関、地方公共団体及び指定公共機関が実施する対処措置に関する対処基本方針に基づく総合的な推進に関すること。

二 前号に掲げるもののほか、法令の規定によりその権限に属する事務

(指定行政機関の長の権限の委任)

第十三条 指定行政機関の長は当該指定行政機関が内閣府設置法第四十九条第一項もしくは第二項もしくは国家行政組織法第三条第二項の委員会もしくは第二条第三号ロに掲げる機関または同号二に掲げる機関のうち合議制のものである場合にあっては、当該指定行政機関。次項において同じは、対策本部が設置されたときは、対処措置を実施するため必要な権限の全部または一部を当該対策本部の職員である当該指定行政機関の職員または当該指定地方行政機関の長もしくはその職員に委任することができる。

2 指定行政機関の長は、前項の規定による委任をしたときは、直ちに、その旨を公示しなければならない。

(対策本部長の権限)

第十四条 対策本部長は、対処措置を的確かつ迅速に実施するため必要があると認めるときは、対処基本方針に基づき、指定行政機関の長及び関係する指定地方行政機関の長並びに前条の規定により権限を委任された当該指定行政機関の職員及び当該指定地方行政機関の職員、関係する地方公共団体の長その他の執行機関並びに関係する指定公共機関に対し、指

定行政機関、関係する地方公共団体及び関係する指定公共機関が実施する対処措置に関する総合調整を行うことができる。

2 前項の場合において、当該地方公共団体の長その他の執行機関及び指定公共機関(次条及び第十六条において「地方公共団体の長等」という)は、当該地方公共団体または指定公共機関が実施する対処措置に関して対策本部長が行う総合調整に関し、対策本部長に対して意見を申し出ることができる。

(内閣総理大臣の権限)

第十五条 内閣総理大臣は、国民の生命、身体もしくは財産の保護または武力攻撃の排除に支障があり、特に必要があると認める場合であつて、前条第一項の総合調整に基づく所要の対処措置が実施されるときは、対策本部長の求めに応じ、別に法律で定めるところにより、関係する地方公共団体の長等に対し、当該対処措置を実施すべきことを指示することができる。

2 内閣総理大臣は、次に掲げる場合において、対策本部長の求めに応じ、別に法律で定めるところにより、関係する地方公共団体の長等に通知した上で、自らまたは当該対処措置に係る事務を所掌する大臣を指揮し、当該地方公共団体または指定公共機関が実施すべき当該対処措置を実施し、または実

施させることができる。

一 前項の指示に基づく所要の対処措置が実施されないと
き。

二 国民の生命、身体もしくは財産の保護または武力攻撃
の排除に支障があり、特に必要があると認める場合であつて、
事態に照らし緊急を要すると認めるとき。

(損失に関する財政上の措置)

第十六条 政府は、第十四条第一項または前条第一項の規
定により、対処措置の実施に関し、関係する地方公共団体の長
等に対する総合調整または指示が行われた場合において、その
総合調整または指示に基づく措置の実施により当該地方公共
団体または指定公共機関が損失を受けたときは、その損失に
関し、必要な財政上の措置を講ずるものとする。

(安全の確保)

第十七条 政府は、地方公共団体及び指定公共機関が実施
する対処措置について、その内容に応じ、安全の確保に配慮し
なければならない。

(国際連合安全保障理事会への報告)

第十八条 政府は、国際連合憲章第五十一条及び日米安
保条約第五条第二項の規定に従つて、武力攻撃の排除に当たつ
て我が国が講じた措置について、直ちに国際連合安全保障理事

会に報告しなければならない。

(対策本部の廃止)

第十九条 対策本部は、対処基本方針が廃止されたときに、
廃止されるものとする。

2 内閣総理大臣は、対策本部が廃止されたときは、直ち
に、その旨を公示しなければならない。

(主任の大臣)

第二十条 対策本部に係る事項については、内閣法にいう主
任の大臣は、内閣総理大臣とする。

第三章 武力攻撃事態への対処に関する法制の整備

(事態対処法制の整備に関する基本方針)

第二十一条 政府は、第三条の基本理念にのっとり、武力攻
撃事態への対処に関して必要となる法制(以下「事態対処法制」
という)の整備について、次条に定める措置を講ずるものとする。

2 事態対処法制は、国際的な武力紛争において適用され
る国際人道法の的確な実施が確保されたものでなければなら
ない。

3 政府は、事態対処法制の整備に当たつては、対処措置に
ついて、その内容に応じ、安全の確保のために必要な措置を講

するものとする。

4 政府は、事態対処法制の整備に当たっては、対処措置及び被害の復旧に関する措置が的確に実施されるよう必要な財政上の措置を講ずるものとする。

5 政府は、事態対処法制の整備に当たっては、武力攻撃事態への対処において国民の協力が得られるよう必要な措置を講ずるものとする。この場合においては、国民が協力をしたことにより受けた損失に関し、必要な財政上の措置を併せて講ずるものとする。

6 政府は、事態対処法制について国民の理解を得るために適切な措置を講ずるものとする。

(事態対処法制の整備)

第二十二条 政府は、事態対処法制の整備に当たっては、次に掲げる措置が適切かつ効果的に実施されるようにするものとする。

一 次に掲げる措置その他の武力攻撃から国民の生命、身体及び財産を保護するため、または武力攻撃が国民生活及び国民経済に影響を及ぼす場合において当該影響が最小となるようにするための措置

二 警報の発令、避難の指示、被災者の救助、消防等に関する措置

ロ 施設及び設備の応急の復旧に関する措置

ハ 保健衛生の確保及び社会秩序の維持に関する措置

ニ 輸送及び通信に関する措置

ホ 国民の生活の安定に関する措置

ヘ 被害の復旧に関する措置

二 武力攻撃を排除するために必要な自衛隊が実施する行動が円滑かつ効果的に実施されるための次に掲げる措置その他の武力攻撃事態を終結させるための措置(次号に掲げるものを除く)

イ 捕虜の取り扱いに関する措置

ロ 電波の利用その他通信に関する措置

ハ 船舶及び航空機の航行に関する措置

三 アメリカ合衆国の軍隊が実施する日米安保条約に従って武力攻撃を排除するために必要な行動が円滑かつ効果的に実施されるための措置

(事態対処法制の計画的整備)

第二十三条 政府は、事態対処法制の整備を総合的かつ計画的に実施しなければならない。

2 前項の事態対処法制の整備は、その緊要性にかんがみ、この法律の施行の日から二年以内を目標として実施するものとする。

第四章 補則

(その他の緊急事態対処のための措置)

第二十四条 政府は、我が国を取り巻く諸情勢の変化を踏まえ、我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保を図るため、武力攻撃事態以外の国及び国民の安全に重大な影響を及ぼす緊急事態への対処を迅速かつ的確に実施するために必要な施策を講ずるものとする。

付則

この法律は、公布の日から施行する。

理由

我が国に対する外部からの武力攻撃(武力攻撃のおそれのある場合を含む)が発生した事態または事態が緊迫し、武力攻撃が予測されるに至った事態への対処について、基本理念、国、地方公共団体等の責務、国民の協力その他の基本となる事項を定めることにより、武力攻撃事態への対処のための態勢を整備し、併せて武力攻撃事態への対処に関して必要となる法制の整備に関する事項を定め、もって我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保に資することとする必要がある。これが、この法律案を提出する理由である。

【資料2】

安全保障会議設置法一部改正案(抜粋)

第二条第一項第四号を次のように改める。

四 武力攻撃事態への対処に関する基本的な方針

第二条第一項中第五号を第六号とし、第四号の次に次の一号を加える。

五 内閣総理大臣が必要と認める武力攻撃事態への対処に関する重要事項

第二条第一項に次の一号を加える。

七 内閣総理大臣が必要と認める重大緊急事態(武力攻撃事態及び前号の規定により国防に関する重要事項としてその対処措置につき諮るべき事態以外の緊急事態であつて、我が国の安全に重大な影響を及ぼすおそれがあるもののうち、通常の緊急事態対処体制によつては適切に対処することが困難な事態をいう。以下同じ)への対処に関する重要事項

第五条中第七号を削り、第四号の次に次の二号を加える。

五 経済産業大臣

六 国土交通大臣

第五条中第二号を第三号とし、第一号の次に次の一号を加

える。

二 総務大臣

第五条に次の二項を加える。

2 議長は、必要があると認めるときは、前項に掲げる者のほか、同項に掲げる国務大臣以外の国務大臣を、議案を限つて議員として、臨時に会議に参加させることができる。

3 (略)

(事態対処専門委員会)

第八条 會議に、事態対処専門委員会(以下「委員会」という)を置く。

2 委員会は、第二条第一項第四号から第七号までに掲げる事項の審議及びこれらの事項に係る同条第二項の意見具申を迅速かつ的確に実施するため、必要な事項に関する調査及び分析を行い、その結果に基づき、會議に進言する。

3 委員会は、委員長及び委員をもつて組織する。

4 委員長は、内閣官房長官をもつて充てる。

5 委員は、内閣官房及び関係行政機関の職員のうちから、内閣総理大臣が任命する。

付則(施行期日)

この法律は、公布の日から施行する。

【資料3】

自衛隊法一部改正案(抜粋)

(防衛施設構築の措置)

第七十七条の二 長官は、事態が緊迫し、第七十六条第一項の規定による防衛出動命令が発せられることが予測される場合において、同項の規定により、出動を命ぜられた自衛隊の部隊を展開させることが見込まれ、かつ、防備をあらかじめ強化しておく必要があると認める地域(以下「展開予定地域」という)があるときは、内閣総理大臣の承認を得た上、その範囲を定めて、陣地その他の防衛のための施設(以下「防衛施設」という)を構築する措置を命ずることができる。

(防衛出動時の緊急通行)

第九十二条の二 第七十六条第一項の規定により出動を命ぜられた自衛隊の自衛官は、当該自衛隊の行動に係る地域内を緊急に移動する場合において、通行に支障がある場所を迂回するために必要があるときは、一般交通の用に供しない通路または公共の用に供しない空地もしくは水面を通行することができる。この場合において、当該通行のために損害を受けた者から損失の補償の要求があるときは、政令で定めるところによ

り、その損失を補償するものとする。

(展開予定地域内における武器の使用)

第九十二条の三 第七十七条の二の規定による措置の職務に従事する自衛官は、展開予定地域内において当該職務を行うに際し、自己または自己と共に当該職務に従事する隊員の生命または身体防護のためやむを得ない必要があると認められる相当の理由がある場合には、その事態に応じ合理的に必要と判断される限度で武器を使用することができる。ただし、刑法第三十六条または第三十七条に該当する場合のほか、人に危害を与えてはならない。

第百三条第二項を次のように改める。

3 前二項の規定により土地を使用する場合において、当該土地の上にある立木その他土地に定着する物件(家屋を除く。以下「立木等」という)が自衛隊の任務遂行の妨げになると認められるときは、都道府県知事(第一項ただし書きの場合)にあっては、同項ただし書きの長官または政令で定める者。次項、第七項、第十三項及び第十四項において同じ)は、第一項の規定の例により、当該立木等に移転することができる。この場合において、事態に照らし移転が著しく困難であると認めるときは、同項の規定の例により、当該立木等を処分することができる。

7 第一項から第四項までの規定による処分を行う場合に

は、都道府県知事は、政令で定めるところにより公用令書を交付して行わなければならない。ただし、土地の使用に際して公用令書を交付すべき相手方の所在が知れない場合その他の政令で定める場合にあつては、政令で定めるところにより事後に交付すれば足りる。

10 都道府県(第一項ただし書きの場合)にあつては、国(は、第一項から第四項までの規定による処分(第二項の規定による業務従事命令は除く)が行われたときは、当該処分により通常生ずべき損失を補償しなければならない。

12 都道府県は、第二項の規定による業務従事命令により業務に従事した者がそのため死亡し、負傷し、もしくは疾病にかかり、または障害の状態となつたときは、政令で定めるところにより、その者またはその者の遺族もしくは被扶養者がこれらの原因によつて受ける損害を補償しなければならない。

13 都道府県知事は、第一項または第二項の規定により施設を管理し、土地等を使用し、取扱物資の保管を命じ、または物資を収用するため必要があるときは、その職員に施設、土地、家屋もしくは物資の所在する場所または取扱物資を保管させる場所に立ち入り、当該施設、土地、家屋または物資の状況を検査させることができる。

14 都道府県知事は、第一項または第二項の規定により取

扱物資を保管させたときは、保管を命じた者に対し必要な報告を求め、またはその職員に当該物資を保管させてある場所に立ち入り、当該物資の保管の状況を検査させることができる。

第百三条第三項の次に次の一項を加える。

4 第一項の規定により家屋を使用する場合において、自衛隊の任務遂行上やむを得ない必要があると認められるときは、都道府県知事は、同項の規定の例により、その必要な限度において当該家屋の形状を変更することができる。

(展開予定地域内の土地の使用等)

第百三条の二 第七十七条の二の規定による措置を命ぜられた自衛隊の部隊等の任務遂行上必要と認められるときは、都道府県知事は、展開予定地域内において、長官または政令で定める者の要請に基づき、土地を使用することができる。

2 前項の規定により土地を使用する場合において、立木等が自衛隊の任務遂行の妨げになると認められるときは、都道府県知事は、同項の規定の例により、当該立木等を移転することができる。この場合において、事態に照らし移転が著しく困難であると認めるときは、同項の規定の例により、当該立木等を処分することができる。

第百十五条の二に次の二項を加える。

3 消防法第十七条の規定は、第七十六条第一項の規定に

より出動を命ぜられ、または第七十七条の二の規定による措置を命ぜられた自衛隊の部隊等が応急措置として新築、増築、改築、移転、修繕または模様替えの工事を行った同法第十七条第一項の防火対象物で政令で定めるものについては、第七十六条第二項もしくは武力攻撃事態における我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保に関する法律第九条十項後段による撤収(以下第百十五条の十七までにおいて単に「撤収」という)を命ぜられ、または第七十七条の二の規定による命令が解除されるまでの間は、適用しない。

4 (略)

第百十六条に次の一項を加える。

2 前項の部隊が第七十六条第一項の規定により出動を命ぜられた場合における麻薬及び向精神薬取締法の規定の適用については、前項後段に規定するもののほか、当該部隊が撤収を命ぜられるまでの間は、当該部隊の医師または歯科医師は、麻薬施用者とみなす。

第百十六条を第百十五条の三とし、同条の次に次の十八条を加える。

(墓地、埋葬等に関する法律の適用除外)

(医療法の適用除外)

(漁港漁場整備法の特例)

(建築基準法の特例)

(港湾法の特例)

(土地収用法の適用除外)

(森林法の特例)

(道路法の特例)

(土地区画整理法の適用除外)

(都市公園法の特例)

(海岸法の特例)

(自然公園法の特例)

(道路交通法の特例)

(河川法の特例)

(首都圏近郊緑地保全法の適用除外)

(近畿圏の保全区域の整備に関する法律の適用除外)

(都市計画法の適用除外)

(都市緑地保全法の特例)

第二百二十四条 第三百三条第十三項(第三百三条の二第三項において準用する場合を含む)または第十四項の規定による立ち入り検査を拒み、妨げ、もしくは忌避し、または同項の規定による報告をせず、もしくは虚偽の報告をした者は、二十万円以下の罰金に処する。

第二百二十五条 第三百三条第一項または第二項の規定による

取扱物資の保管命令に違反して当該物資を隠匿し、毀棄し、または搬出した者は、六月以下の懲役または三十万円以下の罰金に処する。

第二百二十六条 法人の代表者または法人もしくは人の代理人、使用人その他の従業員が、その法人または人の業務に関し前二条の違反行為をしたときは、行為者を罰するほか、その法人または人に対しても、各本条の罰金刑を科する。

原稿募集

今国会では成立は無理、という声も出始めた有事法制ですが、採決になれば、多数決でアツというまに可決されます。あなたの行動、参加した集会、詩、イラスト、そのほか何でも、意見、原稿を送ってください。次号も超特急で編集中です。

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九一四

あこら編集部 BOC出版部

TEL (三三五四) 三九四一 FAX (三三五四) 九〇一四

Eメール XLV05467@nifty.com

または doc@mb.infoweb.ne.jp

女性差別は国際社会に訴えよう

―住友裁判を国連人権社会権規約委員会に訴える―

住友電工男女賃金差別裁判原告・WVN世話人

西村かつみ

二〇〇〇年七月、住友電工の男女賃金差別を提訴した私たち原告に対して全面棄却の判決が出ました。「男女で著しい格差があり、それは憲法十四条の趣旨に反する」としながら、女性は無効率な労働力だから企業が差別をしても公序良俗違反とは言えない、としたジェンダーバイアスに満ちた判決内容でした。翌年三月には住友化学の原告に対しても、全面棄却の判決ができました。

私たちは直ちに控訴し、舞台は大阪高裁に移っています。また住友金属の原告たちはこの裁判官に対し、公正な裁判は期待できないと忌避の申し立てをしました。

その後裁判所に提出した、弁護団の精魂込めた控訴理由書は次のような内容です。

まず冒頭で、一審判決がいかに世論や国民の期待にはずれたものであったのかを、一審判決後のマスコミ報道や多くの方々の抗議メールを紹介して論述し、「人間の鎖」行動へとつなげてあります。

そして一審判決が、昭和四〇年代の女性労働者を、性別役割分担意識にとらわれたものとした点については、皆様から寄せて頂いた陳述書で、多くの女性たちが、女性を若年短期労働者としてしか位置づけない企業の壁に抗して、必死に働きつづけたこと、あるいは働きつづけようとして力尽きたことが論述されています。

また、住友電工のコース別管理に合理性がなく、公序良俗違反にほかならないことを、学者の意見書等に基づき論じられ、是正義務のところでは間接差別理論が展開されています。

陳述書は一〇〇名を超える方々からいただき、裁判所に提出しました。毎日新聞も陳述書の内容を紹介し、「――ある人は『星降る夜、独り夜道を涙もぬぐわず歩いた』と陳述書に書いた。悔しさに唇かんだ無数の女の背中が、働く私の前にある」と記事にしてくれました。

また私たちは、会社・国双方へ訴える主張の柱に「女性差別撤廃条約」をおいています。しかし判決はそれを殆ど無視しました。これについても、私たちは、国際法の教授の意見書を提出しています。

国連の人権社会権規約委員会（在スイス）へ差別の実態を訴える

私たちは大企業中心主義の日本で差別をなくしていくために、国内はもちろんですが、国際世論・国際機関にも訴えていかなければ解決しないと、海外への行動も続けてきました。今回のこのひどい判決を何とか海外にも訴え、国際基準で裁判所や国に迫りたいと考えていたところ、昨年二〇〇一年八月にスイス国連の社会権規約委員会で日本政府レポートの審議があるという情報を得ました。実は一九九七年にW W NでI L Oを訪問した時、判決がでたら日本文のままでもいいので持って来るように、

と言われていたこともあり、WWNとともに住友裁判の内容をカウンターレポートにまとめ、スイスへ行こう、となったのです。

政府レポートには、「いろいろな法律をつくり男女平等に向けて前進している」、という美辞麗句の報告が書かれています。その政府レポートに対して、委員会から、「女性に対する差別の禁止に関して裁判の実行がどうなっているか」等の質問が出ていました。

また出発の直前に、最高裁が開示した文書入手。それによれば、労働事件を扱う裁判官を対象に行なう会議で、「労働内容が同じでも雇用形態が違えば賃金格差は許される」、「実定法上、同一労働同一賃金を定めた規定も見当たらない」とする点で、ほぼ見解が一致した、としていることがわかりました。これは、日本が批准しているILO100号条約や国連社会権規約等に違反しています。私たちは急速これを追加カウンターレポートとし、国連に訴えることにしました。

委員会の審議の前に、委員会主催で今回審議する各国のNGOの意見を聞く会議が開催され、そこでカウンターレポートの内容についても一人の原告白藤さんが発言しました。ヒヤリングの前に、ジュネーブ支局の記者に集まってもらい会見をしました。六社の支局長が参加して熱心に報告を聞き、そのうちの五社が午後のヒヤリングの取材に来て、日本へ発信してくれました。「同期同学歴の男性と月収で二十四万円の格差がある」と、差別の実態を言うと、どこでも、びつくりされます。

そして日本政府レポートの審議の日。委員会とは国連ではなく、パレ・ウィルソンという、レマン湖に面したとてもすてきな会議場で開かれました。レマン湖にはヨットが浮かんでいるのが見えます。

日本政府代表は外務省をはじめ各省庁から二十一名が出席、NGOは約七〇名が傍聴しました。これは審議始まって以来最高だったようです。幸いなことに、日本語の同時通訳がついています。

日本の実状に驚愕、同情

委員会の議長はダンダンさんというフィリピンのとても立派な女性です。私たちを含め、日本のNGOの働きかけが実り、日本政府に対して委員から厳しい質問や意見がとび出しました。非常に広範な分野で出されましたが、特に女性の問題では、

- ・差別是正を漸進的に実施するというが、これは他の権利と同じ扱いをしてはいけない。即実施するべき性格のもの。

- ・国際条約より国内の解釈を優先しており、裁判所の裁量に委ねられている。裁判所は条約を認識していない。裁判官の教育を、どう考えているのか。

- ・女性 は男性の六二%の賃金しかもらっていない。どう改善していくつもりか。

- ・同一価値労働同一賃金を日本企業に要求していくのか。これは普遍的な原則である。それが裁判官に理解されているのか、という質問も出ました。



左からマーシャ・フリーマン博士（国際NGO・WRAW会長）、ダンダン議長、石田（住友化学原告）、西村

これらは、私たちがいつも考えていたことで、関連の委員たちが日本の実態について理解してくれたと、とても感激しました。これ以外に、教育、長時間労働、神戸の震災等についての質問も出されました。

委員の質問意見に対して、日本政府は、用意してきたこまかしと抽象的な内容のメモを読みあげるだけで、誠意が感じられず、本当に憤りを感じました。

審議の前日には、ILOの雇用平等部門のセクションチーフ（とてもすてきな女性です）にお会いし、三年前の約束どおり、判決文を手渡し、先の「最高裁文書」について説明すると、今年がILO一〇〇号条約（同一労働同一賃金原則）の五〇周年にあたるそうですが、こちらがびつくりするほど驚かれ、「それは知らなかった、日本政府に立法措置を要求することができます。何とかしたい」と言われました。改正均等法についても、とても良くなったと考えておられたようなので、私たちの実態を知らせ、本質を理解してもらえたと思います。夕方六時から八時まで、二時間も粘ってしまいました。が、彼女もとても熱心に聞いて下さいました。

委員会から、「男女賃金格差の改善に取り組むよう」という勧告

そして八月三十一日、委員会として初めて日本政府に対して「最終所見」が出されました。その中に「男女の賃金に事実上の格差がある状況の改善に取り組むように」、また「裁判官、検察等への人権教育・研修プログラムを改善し、規約に関する認識を向上させるように」という内容が盛り込まれ、見事私たちの活動の成果が実りました。

最終所見を国内で活かしたいと、十一月には、最高裁判所にこの所見を届けに行き、また厚生労働

省や法務省等に対し所見の精神にそって改善をしていくよう懇談しました。ここには、超党派女性議員が八名同席して下さいました。

私たちの裁判は、六月二十一日に高裁第五回を迎えます。私たちは、ILOや国連へ連絡をとり続け、今後も働きかけていき、できるだけ国際基準の目線で挑んで行きたいと思っています。どうぞご支援下さい。

■ 連絡先 (WVN) Eメール wvn@my.email.ne.jp

URL <http://www.ne.jp/asahi/wvn/wvn>



国際条約を踏みにじる裁判所 本田淳亮

裁判長による女性差別—大阪地裁判決の意味 宮地光子

マーシャ・A・フリーマン博士 意見書

住友電工における女性差別の実態—原告最終準備書面

判決を聞いて 西村かつみ／白藤栄子

住友化学・住友金属・住友生命の冒頭陳述書

あごら263号 850円+税

甘いネーミングで人権侵害

個人情報「保護」法案、人権「擁護」法案など、現行憲法の象徴のようなネーミングの法案に、マスコミも珍しく連日大反論を展開しているが、プライバシーの権利保護を明確にしないまま公権力にとつて都合の悪い取材の拒否などが可能になるこの法案は、官に対する民の監視よりも、民に対する官の規制を重視、「第二の治安維持法」では、と危惧されている。

「改革」の旗の下に、期待された「改革」をほとんど実現していない小泉内閣、この人権三法と有事立法には異常に熱心。議決はまだ先、という油断をついて、抜き打ち的に成立させるという情報もあり、瞬時も気を許せない。市民団体は五月下旬、数万人規模の集会を各地で次々に打って、必死の抵抗。

危険「テロ資金供与防止条例」

「テロ資金供与防止条例」と関連国内法「公衆等脅迫目的

犯罪行為のための処罰に関する法律案（テロ資金提供処罰法案）」は、野党を含め賛成多数で衆議院を通過したが、「テロ資金供与防止条約」は、対象となる「テロ行為」の定義があいまいで、国連でも意見が分かれ、米・ロ・中・独を含む大多数の国がまだ批准していない。また、関連国内法、「テロ資金提供処罰法」は、授受された資金がテロ行為に使われたかどうかにかかわらず、一〇年以下の懲役または一千万円以下の罰金が科されるといふ、刑法にもない「カンパ罪」の新設だと、日弁連は反対声明を発表した。戦前の治安維持法が「結社の目的遂行のためにする行為」を処罰対象として、抵抗勢力を封じ込めたことを決して忘れてはならない。

米軍支援、半年延長へ

政府・与党は、アフガニスタンでテロ組織攻撃を続けている米軍への自衛隊支援活動が五月十九日に切れるのを受け半年間の計画延長を五月十七日、また追加経費一五〇億円を二一日、

閣議で決定した。計上された協力支援活動費一七三億円(うち艦艇用燃料八〇億円)の年度末までの執行は九一億円。今回それを上回る額が計上されたことには、防衛庁や与党内からさえ疑問の声があがっている。

なお、米政府首脳は、四月二十九日、与党三幹事長とワシントンで会談、アフガンの軍事行動はまだ時間を要すると、イージス艦とP3C哨戒機の派遣を要請したが、日本側は米軍の武力行使と一体化する懸念があると、支援艦艇数は従来どおりにちなみにイージス艦は世界で日米のみが持つ超高度情報艦。

防衛庁長官「自衛隊は軍隊」と明言

五月十六日の衆院有事特別委員会で、石破茂氏(自民)の「自衛隊は軍隊か」の質問に、中谷防衛庁長官は、「外国からの侵略に対抗する実力を持つものを軍隊と言うのなら、自衛隊も軍隊というのは可能。国際社会で軍隊と位置づけられていると認識している」と回答した。

アニメ・漫画の児童ポルノと児童の武力紛争禁止

五月八日(一〇日の国連子ども特別総会(子どもサミット))

で、世界の子どもたちは、「私たちはストリート・チルドレンであり、エイズの犠牲者であり、戦争と貧困の孤児です」と自らの声で訴えた。初日から、「基本的な生きる権利さえ剥奪されている」というパレスチナに対し、「子どもを自爆テロに使うのは国際法違反」とするイスラエルなど、成人社会を反映したものとなったが、児童買春、児童の戦闘への参加禁止など、懸案の議題を可決して、子どもたちによる人権と平和の確立を誓った。

日本政府も、十八歳未満の買春・ポルノを禁じた「武力紛争における児童」の選択議定書に署名した。共に九〇年発効の児童の権利条約に付随するもので強制力があり、批准には国内法の整備が求められる。武力紛争の関与禁止で、自衛隊の少年工学校生の検討も必要になる。

望月百合子さんの遺志を受け現代女性研が発足

石川三四郎と活動、『女人芸術』に参加、『婦人戦線』を創刊した女性運動の先駆者、望月百合子さんは、九〇歳を過ぎてもなくしゃくとして活動を続けておられたが、「自分の百年に若い人が続いてほしい」と、NPO、現代女性文化研究所を団体申請、東京都に受領された三日後の昨年七月九日、百歳で亡くなった。

このNPOは昨秋認可され、代表理事には女性史研究者・岡田孝子さんが就任。六月八日、四谷の主婦会館で「望月百合子忌 望月百合子とその時代―二〇世紀再検討」シンポジウムを開催、今後は市民講座や研究会、海外との情報交換などを行う。

連絡先は〒160-0022 東京都新宿区新宿3-35-15

沢田ビル5F TEL03(3341)8522

東京・多摩市長に渡辺幸子さん

汚職による出直し市長選で、前市民部長、渡辺幸子さん(53)が、四月二二日次点の二倍の高得票で当選した。市民の支持を、自民・公明の市議や、多摩生活者ネットワーク等が後援、無所属を貫いての勝利。東京都の女性市長は国立市に次いで二人目。市町村の女性首長としては九人目。

福岡・杷木町町長に中嶋玲子さん

背任罪に問われた前町長の出直し選挙で、四月一六日、中嶋さん(48)が無投票当選した。中嶋さんは兼業農家。JA女性部や農作業支援グループなどで活動、九五年以来、同町・町議をつとめてきた。

新潟参院補選、徳島市長選で市民候補が勝利

小泉政権下の大きな選挙として注目された四月二二日の新潟参院補選は、〈あこらメイト〉黒岩秩子さんの長男守洋さんが次点を二〇万票も離して圧勝、また徳島市長には吉野川可動堰計画反対で市民運動を続けていた小池正勝さんが、それぞれ無所属で勝利した。

桑江さん大善戦して敗退

立候補の遅れから苦戦を予想されていた沖縄市長選の桑江テル子さん、前候補者の約二倍の二万二千票を得て、午後十時十八分、ようやく当落が確定する大接戦を展開した。

最大の争点は東部海浜開発計画。「何としても海を守りたかったが、あまりにも時間がなかった。でも負けてもさわやかです。これだけの反対があったことを受けとめてほしい」と桑江さん。

〈あこら湘南〉誕生

地域に〈あこら〉の拠点を、と模索していた大浅田敦子さんの努力が実って、〈あこら湘南〉が藤沢に誕生。五月二三日、藤沢

市民活動推進センター大会議室で、浮田久子さんの講演会、斎藤千代さんを迎えての座談会で幕を開けた。「あせらずゆっくり確実な運動を」をモットーに、藤沢周辺のグループともネットワークキングしつつ、「自分育て」を続けていくとのこと。この二七六号は、その初仕事。

連絡先は〒2551-0031

神奈川県藤沢市鵠沼藤カ谷4-13-28 大浅田敦子さん。

警視庁「通信傍受法」を初適用

電話や電子メールの傍受を捜査機関に認めた通信傍受法は、その弊害を懸念されているが、一昨年八月の施行以来の初適用として、警視庁が川崎市内の暴力団組員等数人を覚せい剤取締法違反で逮捕していたことが判明した。

調べでは、昨秋、覚せい剤を示す隠語「S」を使って販売宣伝する携帯電話サイトを発見、同法に基づき傍受令状を東京地裁に請求、認められたため、今月一月下旬から通話内容を約十日間傍受、取引現場で買い手二人を逮捕、三月下旬には密売していた組員一人を逮捕したものの。

しかし通信傍受法は「通信の秘匿」という基本的人権を侵害する恐れをはらんだまま成立しただけに、今回の薬物取引事件

が、十分な根拠に基づいて適正に運用されたかどうか、十分な検証が必要、との声があがっている。

「地方の時代」映像祭、打ち切りに

故・長州一二神奈川県知事の提唱で始まり、二十一年間、自治体とテレビ放送界が共同で開催する唯一のドキュメンタリーの祭典として知られてきた『地方の時代』映像祭(神奈川県・川崎市・同祭実行委主催)が財政難で中止される。

毎年全国から一〇〇―一五〇作品が寄せられ、本島長崎市長の「市長の発言」(長崎放送制作)など、地方からの発信に光を当ててきただけに惜しまれる。開催費は一千万円、県と川崎市が折半していた。

営団地下鉄に、初の「女性運転士」

かつて女性が進出できなかった分野でも、現在はほとんど女性に開かれているが、最後のとりでの一つ、「地下鉄の運転士」に三月一四日、営団銀座線初の女性運転士(二五歳、平成七年入団、入団七年目)が誕生。地下鉄なので運転の姿は見えないが、後輩の励みにもなり、話題を呼んでいる。

赤ちゃん研究所発足

若い母親の育児ノイローゼが深刻になっている。

東京女子医大では、今まで見えない、分からない、とされていた乳児の心理を、感覚を科学的に調べることから、より精細に読みとりたいと、同大学付属病院で出産した乳児とその家族を対象に、新生児期からの調査を始めた。

調査によると、たとえば生後五日目から、高音を聞く時と低音を聞く時では脳波が違ふことが明らかになった。

これまで子育てでは経験則や思いこみが多く、育児疲れの一因になっていたが、科学的な研究が進めば、より楽しい育児ができるのでは、と期待されている。同大学乳児行動発達学・小西行郎教授は、「子育ての不幸の多くは、親の過剰な推測に基づくもの。データを調べれば調べるほど、子ども自身に、天性の能力・脳力があることがわかる」と、今後の研究に期待している。

原発の後処理に三〇兆円

原発がスタートする時、市民は、老朽化した時の処理にも巨費がかかる、と激しく抗議を続けたが、「最も経済的な電力」と

して、政府も電力会社も、鳴り物入りで推進を続けてきた。

しかし、現実には故障が続出しはじめ、電力自由化論議も盛んとなり、電気事業連合会は、放射性廃棄物処分や発電所撤去、核燃料再処理などの後処理費用について、初めて長期試算。二〇四五年までに全国で約三〇兆円にのぼることを発表、政府の新たな支援策を求めた。しかし産業界でも、核燃料再処理計画の凍結を求める声が大きくなっており、市民運動の動きも活発化している。

なおドイツでは今年二月に国内十九基の原発を段階的に廃止する「脱原発法」を施行している。

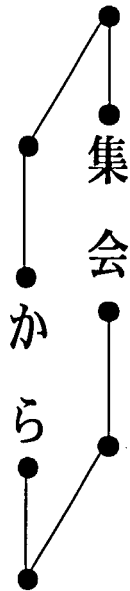
猪口さん、軍縮大使に

上智大教授、猪口邦子さんが、四月十二日、ジュネーブの軍縮会議代表団大使に。民間からの女性大使は二人目。

■ 計報

関口祐子さん 「日本古代婚姻史の研究」など、古代女性史

研究者。元清泉女子大非常勤講師。四月一三日、六六歳で葬儀は近親者のみで行われ、別途お別れ会が開かれた。



鎌倉・子どもと教科書ネット21発足集会

三月三十一日に（鎌倉・子どもと教科書ネット21）の立ち上げ講演会をしました。

はじめ鎌倉市教育委員会は後援してくれていたのですが、私たちの作ったチラシの裏の会員募集の欄の中に、（新しい教科書をつくる会）の教科書を子どもたちの手に渡したくないとはつきり明記していたので、「中立性・公平性・公正性に欠ける」として取り消されました。ここにはすり替えがあります。市は有力市議からの圧力を受けてすぐに腰砕けになったのです。鎌倉の教育行政は民主的に行われているとは到底言えません。

本番数日前にやっと新しい会場を押さえ、チラシまきをしましたが、成功するだろうか、と不安でした。また、佐義文さんのところには右翼から嫌がらせが入っているとのことで、警察に警備を頼みました。

いよいよ当日となり、二一五名の人が駆けつけてくださいました（感謝！）。小森陽一さんは会場の笑いを取りながら司会も兼ねて進行役を勤めてくださいましたが、聴衆はその話のわかりやすさに「聴きにきてよかった。また聴きたい」と思ったようです。斎藤貴夫さんの「（教育の）機会不平等」を取り上げ、江崎玲於奈氏や三浦朱門氏の問題発言を紹介しながら、この四月から始まった「ゆとり教育」の背後にあるものを解き明かしてくださいました。会場にはもちろん若い母親もおり、そのうちの一人は世の中の出来事を眼を凝らして見なければ、という気持ちをすえつけてくださったと言っていました。

佐義文さんはあと二年で定年というときに（つくる会）に対抗するためにはサラリーマンとの二足のわらじでは無理と判断してフリーとなり、（子どもと教科書全国ネット21）に専念された方です。おかげで、それまで眠っていた市民運動が息を吹き返し、去年夏の教科書採択は市民の力で何とか（つくる会）教科書の採択を阻止できたのでした（採択率〇・〇五%未満）。

お二人のお話のキーポイントは以下の部分だったと思います。（つくる会）の運動は経済界からの要請であること、九条はずしの改憲がその眼目であること、そのために愚民

に、「軍隊を捨てた国」としても知られている。

一方、「憲法九条」で明らかに「戦争放棄」をしているのは日本が、アフガニスタンに「自衛隊」を派遣し、有事法制の立法化をはかろうとしている。「軍隊」を持たなければ国を守ることができないのか……。五月七日、東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟小ホールで、そのようなテーマをかけた、〈映画『軍隊を捨てた国』を観て、コスタリカの話聞く会〉（主催・同実行委員会）が開かれた。

〈話を聞く会〉は三部構成で、一部は映画「軍隊を捨てた国コスタリカ」の鑑賞と制作者の早乙女愛さんの講演、第二部はピアノと歌の演奏、三部では、今日の集会のハイライトである、コスタリカから招聘した国際法学者で国際反核法律家協会副会長であるカルロス・バルガス教授の基調講演と参加者との対話集会があった。

この集会は長年弁護士会の中で平和活動を推進してきた池田真規弁護士や市民らと呼ばかけ人となって実現した。三百人定員の会場には、予想を大きくこえる三百六十人以上の人がつめかけ熱気にあふれた。

映画『軍隊を捨てた国・コスタリカ』（企画・早乙女勝元制作・早乙女愛 監督・山本洋子）は、内乱を経て一九四九

政策が必要となり、一部のエリートがいれば大半の国民は黙って従う愚民のほう为国にとつて都合がいいことなど。

教育の大改変の背後にある考えが聴衆に理解されたことと
思います。町村元文部大臣は予定されていた「総合学習」の中に自衛隊体験を含めるのが良いと発言していましたし、奉仕活動の中で愛国心を養ってもらうべき、と当時の森首相は発言していました。（つくる会）の教科書はフジ・サントリーグループが経済界と自民党の旧勢力の後押しを受けてつくったものと捉えたほうが実状に即していると思います。（余談ですが、私は十月九日のフジテレビの朝の番組キャストが「日本も自衛隊を出さざるを得ませんねえ」と言った時、「フジテレビは怖い」と思いました。）

これからも亡き阿波根昌鴻さんが教えてくださったように「平和を愛する市民の唯一の武器は『学習』である」と信じて、『学習』する仲間同士がつながりあつて次世代のために平和を守っていかなければ、と決心しています。

（鎌倉市・神谷扶左子）

軍隊を捨てた国コスタリカの話聞く会

中米の小さな国コスタリカは動植物の宝庫であるとともに

四九年に常備軍を禁じたコスタリカの「今」の姿を、抑制されたナレーションと沖縄出身の仲村清子さんの大地に根を張るような踊りの導入で、人々の暮らしに根付く「民主主義」と、生き生きとした子どもたちの表情が「軍隊のない世界」を浮かび上がらせてくるといふ、異色のドキュメンタリー作品。

カメラは学校や市場、デモなど市民の日常生活を淡々と追っているだけで、「軍隊」とは、「平和」とは何かを声高に叫ぶこともない。映画を観た人たちに「あなたにとつての平和とは何ですか」と、やさしく問いかける作品となっている。すでに三月に封切られ、現在各地で自主上映されている。

関心を集めている。



参加者の質問に熱心に答える
カルロス・バルガス教授

上映後、挨拶にたった早乙女愛さんは、「軍隊というないものをどうやって映像化するのか大変に苦労しました。この映画が、日本に住む私たちが平和とは何か、今から何ができるかを前向きに、創造力豊かに考えるきっかけになれば大変うれい

です」と感想を述べた。

映画に引き続いて行われた、

カルロス・バルガス教授の基調講演の中で、氏は「軍隊を持てば、それは必ず権力に腐敗をもたらします。コスタリカは軍隊を捨て、そこにかかる予算を教育・福祉に回し、民主主義の国を作りました。それが現在の国の発展の基礎になりました。紛争は対話で解決し、決して暴力で解決しない。またコスタリカは周辺で戦争や内戦が起こると仲裁にでかけます。軍隊を捨て、永世中立宣言をしましたので、外国から信頼されて、侵略されない国になり、軍隊を持つ大国と対等に交渉することができるようになりました」と、コスタリカはなぜ軍隊を捨てたのか、国民が軍隊をもたないことで得たものは何かについて、通訳を交え熱心に語った。

その後の対話集会では、参加者から様々な質問がでた。その中で、「同じ平和憲法をもつ日本とコスタリカが今のように大きく隔たってしまった一番の原因は」との質問に、バルガス教授は「原因はとても簡単です。それは、日本が自衛隊を持ち、そして国家予算の1%を軍事費に使っていることです。この自衛隊は、国際的にも、またインターネッでも、アーミー・フォース、つまり軍隊とはつきりと呼ばれています」と明解に答えた。そして、最後に、「日本は憲法九条を遵守してアジアのセンター的役割を担い、世界平和のリーダーになってほしい」と結んだ。

(T)

構造的沖繩差別支配を許さない

平和市民連絡会事務局長 崎原成秀 さきはらせいしゅう

沖繩は今年、対日講和五〇年、日本への（復帰）三〇年を迎えた。「講和条約」によって日本は、占領行政から解放され独立を勝ち得たとして喜び、沖繩は、その「人質」となつて、アメリカの信託統治下のもと米軍による苛酷な支配下に投入された。一九四七年に天皇メッセージがマッカーサー元帥に寄せられ、「沖繩が今後四〇年ないし五〇年、それ以上」の年月に亘つて

の米軍統治下にあつてよいと進言している。敗戦直前、侍従の進言を拒否し「国体」護持の自己保身に走り、日本で唯一地上戦の惨劇を招いた沖繩を再び犠牲にした天皇に象徴されるように、日本にとって沖繩は「利害」の対象でしかなく、その思想は今日にも通じる。

（復帰）三〇年、沖繩はどう変わったか。沖繩マスメディアは「復帰」特集を大々的に組み報じている。確かに経済的側面で言えばよくなっていることが、こ

れはあたりまえのことではある。本土に於いても三〇年前と今日では国民所得に於いて向上しているし、沖繩もその例に違わない。しかし、その所得格差は常に大きな開きがあり、沖繩は本土の七割にとどまつている。その格差の最大の要因は、「国土の〇・六％に過ぎない沖繩に全国の七五％の米軍基地が存在すること」であるのは多くの識者が指摘するとおりである。観光産業の目立つ沖繩にあつて、目立つた産業が育たないのは日米安保の要としての基地優先政策がその障害となつている。ここ数年来の沖繩の失業率は常に八％を超え、本土の二倍の高さにある。

さて、復帰前と復帰後の基地問題を見たとき、経済問題を含め、日本が沖繩にとり続ける構造的差別支配の実態がより浮き彫りになる。戦後二七年に及ぶ米軍統治下の沖繩は、植民地としての苦難の歴史であつた。占領行政が発する「布令・布告」は、沖繩民衆が絶対服従しなければならぬ「法規」として存在した。米軍に反抗的姿勢を示す市長を追放（那覇市長）したり、軍政にとって都合の悪い民事裁判を軍事裁判に移送（サンマ裁判）したり、基地拡大・強化のための土地

沖縄から

強奪に反対すれば「銃剣とブルドーザー」による強権発動を発するなど、沖縄民衆は基本的人権、財産権、生存権が剥奪された状況にあった。青信号で道路を横断した小学生が米軍に轢殺され、酒酔い運転の米軍に轢殺されても軍事法廷では無罪にもなる。極悪な殺人、レイプ事件など米軍犯罪は闇から闇へと消された。屈辱と人間としての尊厳を踏みにじられた沖縄民衆の怒りは一九七〇年十二月に発生した「コザ暴動」(米軍—黒人は対象外—車輛八四台を道路中央で焼き払う)事件となって爆発した。

沖縄の施政権が日本に還った復帰後はどうだっただろうか。日米安全保障条約で基地提供の義務を負わされた日本政府は、極東地域の平和と安定に沖縄米軍基地の果たす役割は重要だとし、沖縄民衆の根強い要求である「米軍基地の即時無条件撤去」に対し「核ぬき本土並み返還」を主張した。しかし今日、「核ぬき」が沖縄民衆を欺くものであったこと、沖縄基地の存在や核の存在が条約の条件であったことが明らかになっている。

かつて沖縄米軍基地は、朝鮮戦争、ベトナム戦争侵略前線基地としてこの機能を最大に発揮した。近くは湾岸戦争、

現在ではアフガン、イラク、フィリピンへの作戦行動に、グリーンベレー、海兵隊の出動、嘉手納空軍基地からのF15戦闘機の出撃など復帰前以上に地域は拡大され、戦略基地としての再編強化が進められている。

一九九六年の「県民投票」で圧倒的多数の県民が基地の「整理・縮小」を望み、九七年の名護市民投票では、防衛施設庁の悪質な妨害をはねのけ「辺野古海上基地ノー」の意思を明確にしたにもかかわらず、政府は、民主的手続きを否定し、海上基地建設を強行している。

政府は九七年、九九年の二度にわたって米軍特措法を改悪し、沖縄民衆の抵抗権、財産権をも奪いとった。増加の一端をたどる米人軍属による事件・事故に抗し、地位協定の見直しを政府に迫っても「運用改善」でお茶をにごし、沖縄民衆の人権をないがしろにしている。その現実には、布令・布告乱発の米軍統治下以上に悪質である。その代償として「振興策」を見せびらかせ羨望を誘う卑劣な策動は、コザ暴動に似た民衆の怒りを誘発させるであらう。沖縄はすでに有事体制下にある。

(沖縄から基地をなくし世界の平和を求める市民連絡会

略称・平和市民連絡会)

語りかけたいあなたへ 45

大里知子

四月の恋

まだ時々、寒い日はあるけれど、北国にもようやく春の気配がただよいはじめた。

今年は、全国的に桜の開花が早いということで、花輪のお花見ももう間近ということが感じられる。

毎年、桜の季節が近づくと、今年こそお花の名所に行こうと、意気込んでいるのだけれど、いざ桜の見頃を迎えると、雨の日が続いたり、体調が悪かったりで、結局、我が家の周辺の桜を見物して、おわりになってしまっている。

はたして今年は、どんな桜がみられるやら。

そんな四月の日曜日、テレビ朝日の「新・題名のない音楽会」は、「四月の恋」と言うテーマで、レギュラーの羽田健太郎に加えて、バイオリンストの前橋汀子・歌手の布施明・本田美奈子が出演。

前橋汀子がバイオリンを弾いて、布施明と本田美奈子が歌った「タイム・トゥ・セイ・グッバイ

イ」が、なかなか聞きごたえのあるものだった。

布施明が、もし「タイム・トゥ・セイ・グッバイ」をCDに収めていたら、求めたいと思ってしまうほどだった。

出演者全員で「愛」について話していて、布施明が「愛には限りがある」と言えば、本田美奈子のほうは「愛は限りがない」という二人のやりとりが面白かった。

私も、恋のほうの「愛」には限りがあると思う。

もし、愛に限りがないとすれば、子供に対する親の愛だけに、限定されるのではないだろうか。前橋汀子が羽田健太郎に、「バイオリンが恋人のようなものでしょう」と、言われていた。

こういうことを言われるのは、それだけバイオリンにかけるものが、大きく感じられたためかもしれない。

自分が一生懸命に打ち込んでいることを、他人に「恋人」と言われたり、また自分自身で思うことは、たいへん素晴らしいことであるし、しあわせなことと考える。

なぜなら、私も文章作りに「恋人」に傾けるだけの深い優しさや、この上ない情熱を注ぎ込めたら、どんなにいいかと何時も想っているからだ。

愛に限りがあるように、やがて私の文章作りにもかならず限りがあり、終わりの時がくるだろう。その時まで、自分に向かって全力投球したいと思っている。

新潟県議会で論議を呼ぶ

「男女平等条例案」

二月定例新潟県議会で提案された「男女平等社会形成推進条例案」は、県議会で論議を呼びました。

同条例案は、性別にとらわれず個性や能力を発揮できる社会づくりを目的に県が提案したもので、倉元正子さんはじめ、（あごろ）の方々も尽力したすばらしい内容でしたが、三月四日、県議会「一般質問」に立った自民党県議は条例案に関連して、「女性の労働参加は家族制度を完全に崩壊に導く」と批判。主婦の存在を強調して「女は女らしくあるべきだ」と述べ、女性の職種を「教師、保育、看護」などに限定しかねない発言を行いました。この発言に対して、多くの県民から新聞投稿（新潟日報・三月十日）などの抗議が殺到しました。

また、県議会厚生環境委員会でも論戦がありました。が、自民党県議団により、「農林水産業における男女格差」を指摘した条例前文の一部などが修正削除され、県議会最終日に可決しました。

本県の特徴でもある産業分野では残念ながら後退した条例になりましたが、条例の制定により新潟県の男女平等社会へ向けた政策がさらに推進されていくものと期待されています。

(新潟県青海町・鈴木勢子)

「あらがとうございました」

▼平和と人権、環境を大切に思う（あごろ）の方々はじめ、全国の皆さまから「テル子ががんばれ！」「海の生き物たちを守るためにも桑江ガンバレ！」と、熱い熱いエールをいっぱい頂きました。

私は全力を出し、政党も労組も市民団体も女性たちも一枚岩になって全力投球しました。しかし、一か月という時間はあまりにも短すぎました。九合目まで登ったのに日が暮れ、"日没時間切れ"でした。

でもこの市長選挙も、私の目ざす運動の一里塚です。これをさらなる前進のためのステップとして、生きる限り戦い続けます。応援して下さい。皆さんに心から感謝を申し上げます。

(沖縄市・桑江テル子)

[274号]

▼先日は『あごろ』誌で「平塚らいてうの生涯」の素敵なご批評をお載せ下さり、ありがとうございます。

三月二十三日からロードショーをしておりますが、お陰様で好調な出足です。これからも一人でも多くの方にこ

覧いただけるよう頑張つてまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(東京都・高野悦子)

「編集部注」「平塚らいてうの生涯」は、前売り券の売上げが非常に好調で、たいそう混み合っているのです、開演三十分前にはおいで頂きたいとのこと。

（あごろ）でお預かりしている割引券（一八〇〇円を一五〇〇円）にも、残り少なくなりました。お早くどうぞ。前売券は有効期限が六月七日までになっていますが、六月二十一日まで通用します。上映は六月二十八日までです。

「退職しました」

▼陽春の候、皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

このたび私は新潟市女性センターを定年退職いたしました。（新潟に女性センターをつくる会）の事務局として設立運動にかかわったことがきっかけ

で、新潟市女性政策課（現男女共同参画課）事業係の嘱託として女性センタ―に勤務いたしました。

この十九年間、私の四十代、五十代の人生の中で最も充実した時期に、このような形で女性センターにかかわれたことは、本当に幸せでした。これも皆様のおかげと感謝しております。また、多くの方たちとの出会い、良いネットワークが結べたことも、私の貴重な財産となりました。

これからは、この財産を活かし、NGOとして女性の地位や、ジェンダー、フェミニズムをライフワークとしていきたいと思っています。これからもどうぞよろしく願っています。

(新潟市・藤田美恵子)

▼三月三十一日をもちまして総務部男女共同参画室を最後に那覇市役所を退職いたしました。

願いますと一九七二年祖国復帰の年に那覇市勤務以来、はや二十九年、

本当に感慨深いものがありますが、在職中は公私ともに格別のご芳情を賜り誠に有難く厚くお礼申し上げます。今後のことについて準備中のところではございますが、楽しいライフステージにしたいと計画しております。

なにとぞこれからも変わらないご指導と末永いご親交をお願い申し上げます。

(那覇市・栗国千恵子)

（栗国さんは、「赤毛のアン」というステキなコーヒー・ショップを開店。栗国さんのお人がらで、いつも賑わっています。那覇にいらしたら、ぜひどうぞ！）

「三十周年」

▼あごろ三十周年おめでとうございませう。よく三十年つづけてこられましたね。おつかれさまです。おかげさまで、いろいろな人や情報（あごろ）をとおして得ることができ、また、まわりのあの人（あごろ）も橋渡ししてきました。先輩方から私たちへ、世代をこ

えて伝わるには、やはり（あごろ）のよ
うな具体的な媒介があることが不可
欠です。

ある時には封を切るのもどかし
く、またある時は背表紙を眺めるのみ
のつき合いもあつての二〇数年…。

“おかげさまでありがとうございま
す！”の心境です。三〇周年を記念
して、あらためてバックナンバー十
五を注文して、仕事場に資料として
おいておきます。（内容はそう古びて
いないはず。No.8の「子殺しを考える」
は、忘れられない号です…どこへいった
やら？）（鹿児島市・横山雅子）

【訂正とお詫び】

▼275号の85ページ「新会員から
ひとこと」の欄で、山川久子さん（新
潟県新井市）とあるのは（新潟県妙高
高原町）、星野邦子さん（新潟県中頸
城郡）とあるのは、（新潟県広神村）の
間違いでした。

▼275号の73ページ「議会で男女
平等条例法案批判に抗議殺到」の記
事で、「（あごろ上越）の鈴木勢子さ
ん（青梅町会議員）も、この「女性蔑視
発言」に投書し（新潟日報三月五日）、
「斎藤県議は…」とありますが、鈴木
さんが投書した事実はなく、「新潟日
報三月五日付二十二面掲載「県議
会・斎藤隆景県議の一般質問について
の雑感」と題して、友人・知人などに
ご本人が送られた文書を、「新潟日報に
投書した」とものと誤認して、記事を掲載
しましたことを深くお詫びいたします。
この号に掲載しました鈴木さんの文
章が正しい内容ですのでご諒承ください。

【編集後記】

「有事特集」に急ぎよ切り替えまし
たので、予定していた原稿の一部が次
号回しになったことをお詫びします。
次号は緊急特集第二弾です。胸にあ
ふれる言葉をどんどん送ってください。

【BOCスタッフ募集】

1. 事務・雑用が得意な方
2. 編集経験者

1. 2とも、週何日かでも結構です。
固定給。社会保険もあります。FAX
Xがお葉書をください。すぐご連絡
します。

【あごろ・ボランティア募集】

会費の納入状況調査、バックナンバ
ー、資料の整理、取材、編集など、三
十周年を前に仕事如山積しています。
時給八百円ですが、お礼と交通費を
さしあげます。手伝って頂ける時間
帯など、お知らせください。

【三十周年記念カンパ大募集！】

何とか三十年続けてきましたが、
財政危機は深刻です。今まで骨身を
削って財政を支えてきた人たちが高
齢化しました。一口千円以上、何口
でも、カンパをお待ちしています。ぜひ
お願いします。

「長谷川テル」を遺児と共に偲ぶ中国の旅

◆旅行日程：2002年9月14日（土）～9月19日（日）＝6日間＝

◆旅行代金：188,000円（全食つき・全行程添乗員・通訳つき）

◆募集人員：30名様限定 ◆申込み締切り：2002年7月末日

お申し込みはお早めに！

〈あごら大阪〉の澤田さんたちが手塩にかけて育てた〈夕陽丘女性グループ〉が、創立20年に、92年の10周年に「望郷・長谷川テルの青春」の上映会を開き、3年前『あごら』253号で「闇を照らす閃光―長谷川テルと娘・暁子」の特集を組んだ方々が、会の20周年を記念して、テルの遺児暁子さんとともに『「長谷川テル」を辿る中国の旅』を計画されました。またとないチャンスです。ご参加をお待ちしています。

●申込先：06-6322-2203 芳泉企画・澤田和子 06-6534-5849 (株)トラベルアイ・西島さん

	月 日	発着都市名	現地時刻	交通機関	摘 要
1	9月14日 (土)	関西空港発 北京 着	15:30 19:10	CA-152	午後空路大連を経由し北京へ 着後、ホテルへ (北京泊)
2	9月15日 (日)	北京 発 長春 着	17:30 19:00	CJ-6150	午前、北京市内郊外観光 故宮博物院、天安門広場、 万里の長城などを観光 夕刻、空路 長春へ 着後、ホテルへ (長春泊)
3	9月16日 (月)	長春 発	22:56	夜行列車	午前、長春市内観光 薄儀が暮らした皇宮、偽皇宮吉林省博 物館、長春映画製作所、偽満州国軍事 部旧跡、その他を見学 夕食後、夜行列車にて佳木斯へ (車中泊)
4	9月17日 (火)	佳木斯 発	08:37		着後、長谷川テルと夫・劉仁の墓参 佳木斯市人民政府代表との特別懇談 会、交流会 (佳木斯泊)
5	9月18日 (水)	佳木斯 発 ハルビン着 ハルビン発 北京 着	午前 20:20 22:05	貸切バス CA-1622	208細菌部隊罪証陳列館や太陽島公園 欧州建築物の建ち並ぶ中央大街など ハルビン市内・郊外を観光 夜、空路北京へ 着後、ホテルへ (北京泊)
6	9月19日 (木)	北京 発 関西空港着	09:15 13:00	CA-927	午前、空路帰国の途へ 着後、入国手続き

利用航空会社：CA中国民航・CJ中国北方航空 ホテルはすべて一流ホテル

目次で振り返る『あごら』30年

(1978年1月～80年5月)

一九七二年二月、『あごら』創刊。今年二月で満三十年。その歩みを前号から目録としてお届けしています。今回は、一九七八年一月(三十三号)から八〇年五月までをご紹介します。

一九七七年一月、従来の厚い『あごら』をつなぐ、より身近な問題提供誌として、A4判十六ページの月刊『あごらMINEE』を創刊。主として各地の拠点が編集を回り持ち担当、それぞれの「発信力」を高めました。

月刊の誕生で、『あごら』は第三種郵便物の許可を得ることができ、従来の厚い『あごら』も、「特集」として、第三種の料金で発送できるようになりました。

現在の号数は、この『MINEE』の号数からスタートしています。したがって、現在までに発行した回数は、現在の号数プラス特集二八号分を加えたものが実数です。

『あごら』は、どの一冊も、みんな心がこめてつくってきました。そのため、普通、出版社では売れ残りは断裁するのですが、『あごら』は、一冊も断裁していません。しかし、倉庫料も大きな負担になりましたので、三十周年記念で、特売します。

これで在庫は保存しないことにしますので、必要な方は、希望の号数をハガキに書いてお申し込みください。

小さなあごらが生まれました

あごらは あなたを待っています

AGORAは ぎりしあのひろば

ぎろん・ざわめき・かいもの・ゆうべん

そこからぼりすのぼりしーが生まれました

この小さなあごらには

学者もなく、市場もなく、

ただ あなたを待つ心だけがあります

全国ちりちりにはたらき

全国ちりちりに考えている皆さん

あごらに声をお寄せください

小さな点が線となり面となつて

働く女性のしあわせにひびいてくる日まで

あごらは あなたを待ちつづけます

(創刊のことばから)

十三号（一九七八・一月号） ㊦100

〈随想〉 母の時代 福田光子

〈快談・怪談〉 女と働くこと 〈あこら九州〉有志

〈訴える〉 愛知県の「教育研修の手びき」

〈女たちから女へ〉 新年のメッセージ

〈伝える〉 1月28日女の大集会

〈聞く〉 割烹着で走る 松本直子さん

〈つばやく〉 池田保子

〈読む〉 『夫婦り来ぬ』鳥巢 路著／『働き続ける女性たち—その現状と課題—』（福岡・女性と職業研究会編）

〈集会より〉 不況は女をさらに痛撃

〈すてきな人〉 あこら九州・石川由紀さん

〈女のつどい・女の講座〉 一月九日〜二月十二日

〈お知らせ〉 各地の〈あこら〉の例会案内

十四号（一九七八・二月号） ㊦100

〈巻頭言〉 おくれている各都道府県の行動計画

〈お知らせ〉 全米婦人行動計画日本語訳（全訳）完成

〈報告〉 私が見た全米婦人会議 河野貴代美

〈あこらのあこら〉 東京周辺に五つの新拠点

〈女のつどい・女の講座〉 二月十日〜三月十三日

十五号（一九七八・三月号） ㊦100

〈巻頭言〉 「しあわせ」の総和は一定か？ 天野正子

〈追跡調査〉 女子短大生と語る

外から見た短大生・内から見た短大生

〈資料〉 女子高校生の進路に関する意識調査

女子高入試状況一例

〈読む〉 『女の子はつくられる』左藤洋子著

〈見る〉 映画「真夜中の向こう側」

〈あこらのあこら〉 英語教室開設／仕事する方募集／読

書室利用規定変更／資生堂製品の不買運動を！

〈女のつどい・女の講座〉 三月十日〜四月十四日

十六号（一九七八・四月号） ㊦100

〈特集〉 続読「ホンネを語る」 （イラスト・渡部譲）

三十一号「夫についてホンネを語る」を読んで

斉藤信彦・富士子

生別分業制を考える—斉藤夫妻のタイプを聞いて—

山口雅弘・里子

〈ふたりで話してみたら〉 〈あこら北海道〉有志

〈カット〉 鈴木トミエ 山口里子

〈お知らせ〉 英語コンプレックスをなくす英語教室／

アルバイト募集 ほか

〈女のつどい・女の講座〉 四月十日〜五月十三日

十七号（一九七八・五月号） 100

〈巻頭言〉 痛みの共有をともなつた女性解放運動を

金住典子

〈見る〉 映画「ジュリア」

〈読む〉 『明日を創る』（吉武輝子をきっかけとして政治を考える会）編

〈あこらのあこら〉

あこら北東京スタート／あこらの仲間になりませんか／英語教室 ほか

〈女のつどい・女の講座〉 五月十三日〜六月十一日

十八号（一九七八・六月号） 100

〈随想〉 文学伝習所の女たち 山下智恵子

〈事例〉 自立への模索―体験記

合田京子／栗木道子／石川由紀／大西和子／高橋ますみ

〈読む〉 差別文書「教育研修の手引き」

〈見せる〉 婦人週間行事第三回「婦人のつどい」

〈参加〉 自治研教育集会実行委員会 奥村和子

〈すてきな女〉 名大工学部助手 杉山せつ子さん

〈呼びかけ〉 〈あこら神奈川〉を作りませんか／共同保育をはじめませんか？

〈女のつどい・女の講座〉 六月十一日〜七月三十一日

第18号 いま女性解放は 78年6月 1300

アビール 女たちよ語り合おう

インタビュ― 個性的に主張的に生きよう

佐藤欣子

全米婦人会議レポート

第二期に入ったアメリカの女性運動

―全米女性会議とアメリカの女性運動を取材して―

深尾凱子

アメリカ的リブ・日本的リブ

―全米女性会議と世界のトップレディを取材して―

下村満子

報告 私が見た全米女性会議 河野貴代美

ティーチン 日本の女性解放運動をどう展開するか①

小沢遼子／斎藤千代／高橋ますみ／田中寿美子／

中島通子／舟本恵美／松井やより／山田朋子

ルポ いま職場でたたかう39人の女たち

法の目をくぐった賃金差別問題

女は五歳劣るのか

一審勝訴、だがこれからが問題

若年定年裁判闘争に勝利したもの

“子持ち女は解雇”といわれて

共闘で“二年首切り制”をストップ

擬装解散工作を破る

“ジパンはダメ”に反発

図書館司書のお腹が大きくては風紀上よくない!?

会社と労働者は親子関係か

大きい基本給二千万の差

正規採用をはばむ“嘱託制”と闘う

派遣販売員の条件改善を

“お茶くみ”問題をしつこく迫り続ける

“原稿料雇い”というふしぎな身分 森田弘子／柿平トネ

やりがいのある仕事を持ちたい

生活基盤の破壊と表裏一体

“百二十日で首切り”に憤慨して

仲間同士の痛みを共有したい

出産退職を強要されて

赤坂美知子

中本 みよ

石川みのり

大木 捷代

梅津佳津美

吉沢 節子

小倉ユリ子

吉田 陽子

沖田 雅子

小倉 静江

秋山 志津

田口美枝子

上田 良子

岡田さやか

上島登代子

北川 允子

佐久間登喜子

玉置 優子

立中 修子

教育の現場で感じる疑問

“生理休暇廃止”の動きに對抗して昇給停止

選別・差別教育に抵抗して解雇

昇格差別闘争で一応の成果はあったが:

“白い巨塔”の夕テ社会の中で

“男性優遇の世帯手当”に反発

異端と思われても平気

障害児混合収容問題にチャレンジ

裁判は自分のためではない

法律や裁判を身近なものに

“残業手当は男だけ”に疑問

自分で食べる分は自分で稼ごう

“組合加入”で締めつけられて

“良妻賢母教育”の犯罪性を訴えて

母親をまきこんだ幼稚園闘争

“女性の権利に関する特別委”に調査申立書を提出

日航地上勤務の三十五人の女性の中の一人

執務中のケガでクビにされて

“鉄連の七人”でがんばる

経理を身につけて女の力になりたい

紹介

三井マリ子

高橋 芳恵

高橋伊久子

谷口 悦子

早川 久恵

村瀬 康子

山崎 博子

森本 節子

山本 和子

上野 登子

八田 尚子

中山 律子

原田 晴代

竹内 洋子

北川ちかこ

鍋島 治子

佐々木元子

小林 恵子

「国際女性学会東京会議」 疑問だらけの『婦人白書』
グループ紹介 まゆの会／まいにち大工

あこら読書室

富山和子『水と緑と土』／伊藤雅子『女の現在―育児から老後へ―』／犬養道子『今日は明日の前の日』／中山千夏『からだノート』／美森成生著 日暮修一画『菜の花と雷さま』／湯浅芳子編著『百合子の手紙』／島尾敏雄『死の棘』／山川菊栄『女性解放へ―社会主義婦人運動論―』

読者のひろば あこらのあこら

17号／ミニ／たより／あこら／仲間いませんか！

新聞切抜帖 77年9月15日〜78年3月31日

資料

女性に対する差別撤廃に関する国際連合宣言

女性に対する差別撤廃に関する国際条約（案）

雇用における男女平等取扱いの促進に関する法律（案）

国内行動計画前期重点目標

東京都行動計画策定にあたっての基本的な考え方と

施策の方向について

アメリカ合衆国女性宣言

アメリカ合衆国国内行動計画

十九号（一九七八 七・八月号） 頁100

〈巻頭言〉 国立婦人教育会館に行つて 斎藤千代

〈意見〉 “しあわせ”の総和は一定か―をめぐつて

私のカラミ節 漆田和代

女みんなが「しあわせ」になるために

山田朋子

戦中派世代は思う せがわ ともこ

〈聞く〉 エスター・ピーターソンさん講演会

〈読む〉 『砂色の小さい蛇』 山下智恵子著

〈報告〉 あこら拠点活動

北海道／北東京／京王／武蔵野／神奈川／東海

京都／阪神／九州

〈女のつどい・女の講座〉 七月十二日〜八月十九日

二〇号（一九七八・九月号） 頁100

〈表紙の言葉〉 差別意識のルーツは赤ちゃんの絵本にも

山口里子

〈話しあい〉 絵本の中の差別を調べて（あこら北海道）有志

〈参考資料〉 絵本リスト 手書き…田代慶子

〈報告〉 （あこら旭川）初顔あわせ

〈見る〉 映画「秩父事件」 栃内邦子

〈けいじばん〉 “人権一〇番” 自分の権利は自分で守

ろう！ ほか

〈女のつどい・女の講座〉 九月八日〜十月二十八日

二二号（一九七八・十月号） 1000

〈提言〉 母性信仰を返上しよう

浅野美知子

〈カッパ〉 母なる大樹

浅野和恵

〈話しあい〉 働くことだけが“翔ぶ”ことか

「あゝら東海」有志

〈随想〉 翔ぶ主婦・翔ばない主婦

合田京子ほか

〈意見〉 女にとって“いい男”とは

石川由紀ほか

〈けいじばん〉 憲法三十年と男女平等―その回顧と展望

―討論集ができました ほか

〈女のつどい・女の講座〉 十月九日〜十一月三十日

第19号 女にとって子どもとは 78年10月 800

論文

日本近代の国家と母性

中島 邦

家族社会学と母子関係

酒井はるみ

現代日本の子殺しに見る母の孤立

佐々木宏子

反母性論―女権拡張運動の申し子（母性）― 国沢静子
インタビュー

自分の精神的財産を与えてやりたい
守ってやらなければならぬ気がして
小室加代子
鎮目恭夫

随想 私にとって子どもとは

私にとつて子どもとは
命はとだえることがない
佐伯康子

私にとつての子ども
卵子、あるのかなあ
河野貴代美

レズビアンであるわたしからの発言
子どもを生む前と後と
辻 友子

私に「未来」をプレゼントとしてくれる
オンナコドモの荒野を行く“熱い関係”
舟本恵美

ティーチン 日本の女性解放運動をどう展開するか②
小沢遼子／紀平悌子／斎藤千代／佐山サチ／高橋ますみ

田中寿美子／中島通子／舟本恵美／松井やより／
水沢耶奈／山田朋子

窓 試験管ベビーに思う／女性団体大連合への動き／
初国際女性学会東京会議

紹介 「八〇年国際婦人年会議にむけて」
―NGOセミナー報告から―

87

ニュー・フェミニズム宣言

グループ紹介

「男と女のための子供講座」／ひまわりぶんこ／

国際婦人年大阪連絡会

会員紹介 自由に呼吸したい：

丹羽雅代さん

あこら読書室

もろさわようこ編『ドキュメント女の百年―女の一生

―』／F・ルボワイエール著 村松博雄訳『暴力なき出

産』／稲村博『子どもの自殺』／エヴァ・フォレスト著

小中陽太郎訳『エヴァの日記』／堀場清子編『ストッキ

ングで歩くとき―戦後の青春4―』／松本路子『のびや

かな女たち』／山下智恵子『砂色の小さい蛇』／日本婦

人団体連合会編『婦人のあゆみ百年』／ベーン・ペイア

ー著 深尾凱子訳『あなたも「ノー」をいいなさい』／

増井光子『動物の親は子をどう育てるか』／半田たつ子

『書くこと生きること』／私たちの歴史を綴る会編『生

きる原点を求めて―主婦の体験した昭和史―』／べっし

よちえ子『軽く軽く舞え』

あこらのあこら

18号／ミニ／あこら北海道あてのたよりから／

あこら九州あてのたよりから／アピール

新聞切抜帖 78年4月1日～8月31日

資料 妊娠・出産に関するアンケート調査中間集約

優生保護法の一部を「改正」する法律案提案理由説明

優生保護法改訂案と条文対照表

優生保護法の変遷と社会の移り変わり

国民優生法（抄）

刑法（抄）

受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律

（第一次案）

二三号（一九七八年十一月） 頁100

《表紙のことば》 共通のテーマを求めて 三好久美子

《快談・怪談》 男は仕事女は家庭 なぜ？

《調査》 子どもの目が見た働く母

《参加》 福岡県「婦人問題セミナー」に参加して 池田保子

《男の声》 「らしさ」について 後小路 久

《訴える》 子連れの母親が婦人会館から退室を促されて

（あこら東海）有志

《けいじばん》 「顔の秘密」について本を出しました／

主婦の作品を募集中

《女のつどい・女の講座》 十一月十日～十二月二十四日

二三号（一九七八年十二月） ¥100

〈詩〉おまえが私のおなかに

てらだまりこ

〈話し合い〉〈あこら京都〉の一年を振り返って

〈あこら京都〉有志

〈随想〉〈あこら〉と私

安富雅恵／阿部ひろ江／稲垣良代／植田早苗

〈すてきな女たち〉

シャンバラ訪問記

北村明子

〈あこらのあこら〉

“おんな解放連絡会・京都” 結成／

ミニ20号に思う／22号調査「子どもの目が見た働く母」

〈けいじばん〉会費値上げのお願い／求人広告ほか

〈女のつどい・女の講座〉 十二月七日～一月二十日

二四号（一九七九年一月） ¥100

〈表紙のことば〉 平等と保障の確立される年に 斎藤千代

〈報告〉 子連れ女は学べないのか？

―名古屋市婦人会館の託児をめぐる―

〈あこら東海〉の小さな闘い

〈思う〉 子連れ女と学習

浅野美知子 ほか

〈見る〉 自立する中国の子ら

山下智恵子

〈意見〉 労基法研究会報告を読んで

塚崎美和子 ほか

〈けいじばん〉 共同保育所の保母さん・保父さんをする

人いませんか ほか

〈女のつどい・女の講座〉 一月十日～二月十日

二五号（一九七九年二月） ¥100

〈詩〉 わたしは女に生まれた

三井まり子

〈報告〉

八〇〇人の熱気―わたしたちの男女平等をつくる会／参加者の声から／宣言

〈アピール〉

労基法改悪提言に労働省へハガキで抗議しよう!!

塚崎美和子

大学女解研の方々、情報を下さい！

勝村和恵

〈あこら〉 全国大会は七月二・三二日名古屋で

〈けいじばん〉 ボランティアグループ（さつき会）の会

報2が出ました ほか

〈女のつどい・女の講座〉 二月十三日～三月二十四日

二六号（一九七九年三月） ¥100

〈表紙のことば〉

地方選こそ―女の出番 編集部

〈インタビュー〉

都知事選三候補にホンネを聞く

“結婚前の腰かけ就職”を改めなくては 麻生良方さん
 甘えを捨てて働け、母性は十分保障する 太田 蕉さん
 ご婦人は、やさしく、あったかく、弱く 鈴木俊一さん
 (ルポ) 東村山市議選に立つ山本かなえさん

(意見) もっと具体的な要求を 梶谷典子

久野さんの意見に反論 浅野美和子

あこらは「さくのない広場なのでは」 館盛静子

(ひろば) 「各地のあこら拠点だより」から

(女のつどい・女の講座) 三月八日～四月二十九日

二七号 (一九七九年四月) ￥100

(表紙のことば) 出口がないということ

斎藤千代

(報告) (あこら) の財政について

(集会から) 「アジアの女たちの会」結成二周年集会

またまた女と老いについて (あこら京王)

(お知らせ) 各拠点から山本かなえさん んにカンパ

(女のつどい・女の講座) 四月十二日～五月二十七日

二八号 (一九七九年五月) ￥100

(表紙のことば) “個”への再スタート 石川美智子

(意見) 主婦の再就職は可能か (あこら京都) 有志

(あこらメイト) 割烹「さつき」を経営 柴田冽子さん

(すてきな男たち)

集会託児をやる男たちの会

塚崎美和子

(報告) 京都・おんな便り

北村明子

(あこらのあこら) 山本かなえさん九位で当選／小沢恵子さん

最高位当選 ほか

(呼びかけ) あこら全国集会は7月21・22日、瀬戸で

(女のつどい・女の講座) 五月七日～六月三十日

第20号 ひろがる女性解放と男女雇用平等法 79年5月

￥1300

論文 女性史におけるウーマン・リブ

水田珠枝

女性解放論についての私の模索と反省 田中寿美子

結婚と女・我——故郷・夢二の世界からの女性解放

漆田和代

随想 私にとつての解放

長い道程

村岡多恵

母の遺産

平塚由己

主婦という日常の中の変革

長谷川友子

幸せな家庭への幻想

山口里子

自利自愛に徹する

天野みちみ

女を弾圧する女たち

ヘレン・ハーデカ

あこらの7年 二〇号を記念して—斎藤千代さんに聞く

拠点報告 —北から南から—

あこらのあこら —私とあこら—

ティーチイン 日本の女性解放運動をどう展開するか③

資本主義社会の中で女が働くということ

青木やよひ／河野喜代美／斎藤千代／高橋ますみ／

田中寿美子／中島通子／水沢耶奈／松井やより／

森節子／山田朋子

ティーチイン 日本の女性解放運動をどう展開するか④

母性を保障し、平等をすすめるよう

紀平悌子／斎藤千代／塩沢美代子／重田小夜子／

下村満子／田中寿美子／中島通子／山田朋子

ルポ 労基法研究会報告をめぐる討論会

アピール 「余白の存在」

舟本恵美

あこら読書室

水田珠枝『女性解放思想史』／伊藤雅子『いどばた考現

学』／R・ブラックラー著 佐治守夫ほか訳『非行少女

—学校カウンセリングと地域—／深尾凱子『歩き出し

た女たち—アメリカレポート—／俵朋子『女の才能が

育つ条件』／渥美育子『女性文化の創造へ』／ジャニス

・デラニーほか著 入江恭子・山崎朋子訳『さようなら

ブルーデイ』／山川菊栄『二十世紀をあゆむ—ある女の

足あと—／駒野陽子『共働き家庭の育児』／森山真弓

『各国法制にみる職場の男女平等』／モード・ヘッグほ

か著 ヤンソン柳沢由実子訳『スウエーデン女性解放の

手引き』／ルシエン・ランソン著 池上千鶴子訳『ラン

ソン先生のからだの本』／河野信子『女の自立—労働か

らの省察』／富士真奈美・飯島ふみ子編著『おんなの自己

診断学』／井上好子編著『おんなのつきあい六法』／もろ

さわようこ編『ドキュメント女の百年』／金住典子監修・

円より子ほか『離婚します—女性のための離婚学入門』

新聞切抜帖 78年9月1日〜79年3月31日

資料 労働基準法研究会報告（女子関係）

女子労働に関する法律（国内・国際）

「私たちの男女雇用平等法案」骨子試案

男女平等に働くための条件整備

労働基準法的女子保護条項廃止反対についてのアピール

『あこら』1号〜20号内容一覧

二九号（一九七九年六月） ¥100

大野和子 ほか

92

〈話しあい〉 “細胞分裂”開始？（あこら北東京）例会

〈意見〉 あこらミニ26号の梶谷さんの提言を読んで

大野千恵子

「あこら」20号のティーチンを読んで 梶谷典子

群馬の助産所で 野村康恵 ほか

〈女のつどい・女の講座〉 六月十一日〜七月二十八日

三〇号（一九七九年七月・八月） ¥100

〈表紙の言葉〉 「家庭の日」ってなあに？ 河野貴代美

〈聞く〉 あこら20号の集いから 宮口純子・横川澄子

〈呼びかけ〉 あこら全国大会にどうぞ ほか

〈報告〉 一・二〇集会とその後の私たち 石原啓子

〈意見Ⅱ反論〉 大野千恵子さんへ 梶谷典子

梶谷典子さんへ ますのきよし

〈紀行〉 ネパール寸描 斉藤千代

〈女のつどい・女の講座〉 七月八日〜八月三日

三二号（一九七九年九月）

〈表紙のことば〉 おんなどこども 石川由紀

〈特集・第二回全国あこらのつどい 自分の解放から社会へ向けて〉

分科会報告から

主婦のあり方を問う

松井やよりさんの講演から（あこら東海）

講演を聞いて

大会に参加して

太田伸子 ほか

小島豊子 ほか

〈意見Ⅱ反論〉 ますのきよしさんへ 梶谷典子

〈お知らせ〉 働く女性の状況を放映

〈女のつどい・女の講座〉 九月七日〜十月二十日

三十二号（一九七九年十月） ¥100

〈表紙のことば〉 出産を考える

宮本明美

〈札幌から〉 私の出産から（あこら札幌）有志

病院別リスト作りをして

坂本典子・細田英理子

つれあいを分娩室に入れること

高橋芳恵・堀奈保子

〈お知らせ〉 お産について、いますばらしい本をつくつ

ています／「あこら」本誌の22・23・24号のテーマと編

集参加者を募集します

〈見る〉 映画『ノーマ・レイ』

〈けいじばん〉 レズビアンのにこみに／「CR ワーク

ショップ」をつくりました ほか

〈女のつどい・女の講座〉 十月八日〜十一月二十五日

第21号 子と母の関係を問う 79年10月 ¥1100

論文 子と母

親離れ子離れ考

母子密着を生む閉塞状況

精神医学からみた子どもにとっての母親

動物の親子

手記 私にとって母とは

十八歳の悩み

どら息子、母を語る

仕事に盗られた、と思った日も……

子を持つて知る子の恩

大島二枚

ライバルにしてよき友人

〈父子家庭〉に育って

母の重み

母、仕事と一人立ちの出発点

炎の中に

インタビュー

おかあさんのこと どうおもおう？

伊藤雅子

谷内真理子

山中康裕

増井光子

山口昌子

いもむしころう

三高邦子

長縄幸子

漆田和代

高橋ますみ

長谷川知子

君名地知子

美森成生

斉藤千代

グループインタビュー 東村山市A学童クラブ

現場から ひきさかれた関係のなかで

石川公子

ルポ 夏の子ども楽園村を訪ねて 宗久知恵子／佐藤統子

講演録 これからの女性解放運動

水田珠枝

主婦のあり方を問う

松井やより

調査 日本の著名企業144社にみる女子社員の待遇

グループ紹介

子どもとつくる生活文化研究会／私たちの男女雇用均等法をつくる会／鉄連の七人とともに性による仕事差別・賃金差別と闘う会

あこら読書室

原ひろ子『子どもの文化人類学』／日本婦人団体連合会編『婦人白書 一九七九年版』／駒尺喜美・小西綾『魔女の審判』／アリス・シュヴァルツァー著 寺崎あきこ訳『性の深層』／ブノワット・グルー著 有沢佐和子・カトリヌ・カドウ訳『最後の植民地』／池上千寿子『女は男より優秀である』／小室加代子『リブ・ラブ・ライフ』／リリアン・ヘルマン著 小池美佐子訳『眠れない時代』／ナディア・スパーノほか著 柴山恵美子訳『イタリア婦人解放闘争史』／富岡多恵子『兎のさかだち』／藤原房子『主婦が就業するとき』／沖藤典子『女が職

場を去る日』／下村満子編著『新女ゼミ8 キャリア作戦』／依朋子編『離婚は怖くない』／丸山友岐子『わが愛と性の履歴書』／福本英子『複製人間の恐怖—みんなの遺伝子工学—』／足立良子『女が見たオーストラリア』／佐藤欣子『閻魔と女神』／エレノア・E・マッコビイ編 青木やよひ・池上千寿子・河野貴代美・深尾凱子・山口良枝訳『性差—その起源と役割—』／下村満子『世界のトップレディたち』／伊丹十三『女たちよ! 男たちよ! 子供たちよ!』／天野正子『第三期の女性—ライフサイクルと学習—』

あごらのあごら 20号／あごら／アピール

新聞切抜帖 79年3月1日〜8月31日

資料 児童憲章

国際児童年について

国際児童年に関する国連決議

児童権利宣言 (仮訳)

ユニセフ (UNICEF) について

国内行動計画前期重点目標の進捗状況

三三三号 (一九七九年十一月) ¥100

〈表紙のことば〉 婦人問題懇話会に参加して 田辺幸子

〈九州から〉 これでいいのか (あごら九州)

小島豊子／福田光子／三好久美子／池田保子／後小路久／小島サカエ／森崎民子

〈講演〉 「自分が変われば社会が変わる」 斉藤千代

講演によせて 「目からウロコが落ちた」 岡北博子

〈アンケート〉 女に生まれてよかった!! 西区婦人のつどい

〈お知らせ〉 『女ならやつてみな! アントニア』上映会／

衆議院の女性議員はほぼ倍増

〈女のつどい・女の講座〉 十一月十日〜十二月二十三日

三四号 (一九七九年十二月) ¥100

〈表紙のことば〉 家族のゆくえ 塚崎美和子

〈読む〉 『女と自由と愛』を読んで (あごら京都) 有志

〈提案〉 一致点を見出すためにもっと論争を (労基法改

正問題) 梶谷典子

〈レポート〉 中国の女たちを見て 末若万智子

〈集会から〉 女たちは労基法改悪を阻止するぞ! 決起集会

〈女のつどい・女の講座〉 十二月八日〜一月二十六日

三五号 (一九八〇年一月) ¥100

〈表紙の言葉〉 出産を考える② あごら札幌 (カト) 山口里子

〈体験談集〉 夫が立ちあつた病院出産・自宅出産・ラマ

―ス法出産

〈意見〉 出産を女と子と男を結ぶ地平へ 加藤てい子

〈あゝらみのミニあゝら

『お産の学校』を編集して／〈あゝら浦和〉 一月から正式発足／〈あゝら大阪〉 呼びかけ中

〈女のつどい・女の講座〉 一月十日～二月二十四日

三十六号（一九八〇年二月） ¥100

〈表紙のことば〉 八〇年代を我が胸に

斎藤千代

〈事務局から〉

『あゝら』二二号にあなたの切実な状況を！（労基法特集号）／デンマークの世界民間婦人会議に参加しよう／

〈あゝら〉の組織づくりのために運営会議「再開」準備中

「老後」をふたたびテーマに〈あゝら京王〉再スタート

国連婦人の十年中間年日本大会参加を目指す／労働省

で「婦人の十年」原稿募集中

〈お知らせ〉 読書室の新着図書／求人！ SE・プログ

ラマー／2月23日保護と平等のティーチン

〈女のつどい・女の講座〉 二月十日～三月三十日

三十七号（一九八〇年三月） ¥100

〈表紙のことば〉 実現された長時間保育 岡部榮美香

〈座談会〉 老後を考える―軽費老人ホームを見学して―

〈あゝら東海〉有志 まとめ・伊藤汎美

〈書評〉 『主婦が歩き出すとき』を読んで

浅野美和子・清水陸子・千田靖子

〈事務局から〉 （世界民間婦人会議）参加の方へ

〈愛知からのレポート〉

集会託児をひろげる連絡協議会 奥村和子

男女雇用平等法をめぐって 奥田祐子

〈見る〉 『沖繩のハルモニ―証言』従軍慰安婦 伊藤克江

〈あゝらみのミニあゝら〉 〈あゝら大阪〉 誕生！／出まし

た！『お産の学校』／第三回運営準備会議／宇井純とい

つしよに歩いて見よう ほか

〈女のつどい・女の講座〉 三月十二日～四月二十七日

三八号（一九八〇年四月） ¥100

〈表紙のことば〉 自己解放とセクシュアリティ 漆田和代

〈座談会〉 『性の深層』を読んで 〈あゝら北東京〉有志

〈あゝら東海〉 ご参加の方に

〈呼びかけ〉 八月二十三・四日〈あゝら〉全国活動者会議

〈報告〉 第四回運営準備会議／世界民間婦人会議に参加

し、北欧の女性解放と福祉を訪ねる旅

〈疑問〉 36号呼びかけ文に 国井マツ江

〈お知らせ〉 BOC出版部、東販に委託販売の口座開設

〈女のつどい・女の講座〉 四月九日～五月十八日

三九号（一九八〇年五月） 卒100

〈表紙のことば〉 養護学校義務化に思う 岡部ひろ江

〈京都から〉 女たちの夜語りあかして

—自己形成史を語る— 〈あごら京都〉

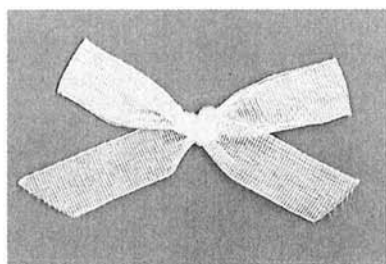
藤井里子／村井恵子／飯島行子／塚崎直樹／稲垣良代
ときはなて自分を！から —女たちの詩コンサート—

木野村啓子

〈事務局から〉 『あごら』22号は「男女平等と母性保障」／

「80年女の集い」は千駄ヶ谷区民会館で ほか

〈女のつどい・女の講座〉 五月十三日～六月十四日



白いリボンで不戦の意思表示を

幅八ミリほどのリボンを蝶結びして、安全ピンでとめるだけの簡単なものです。
見本ご希望の方は、宛先を書いた封筒に八〇円切手を貼ってお申し込みを。

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九―四 あごら事務局

〈あごろ〉は、人と人が出会うつひろば――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる――。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指す ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あごろ」の誌代込みで月額七百円。一年分払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は一千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOC〉の登録も、どつぞで……

一九八〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬を、連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

連絡先

どちらでも〒160-0022 東京都新宿区新宿 一―九―四 中公ビル
☎03-3354-3941(代) FAX03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com

あごろ 276号(5・6月合併号) 有事立法は戦争協力法 ●発行2002年6月10日

●編集 あごろ湘南+あごろ新宿

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体930円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごろ編集部



9784893061249



1920036009305

ISBN4-89306-124-0

C0036 ¥930E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体930円+税

韓日両国の新たな関係を求めて

240人へのインタビュー

歴史を語る 時代の証言

韓日問題研究所編

戦後50年と 東北アジアの選択

相互理解と相互尊重の精神
は人類社会を豊かにする。

夢だけで終わらせない!

この意志が50年目にして本書を産んだ。
両国の、そして在日の、オピニオン
リーダーたちが本音で語る大胆な企画
から真の相互理解と両国のあるべき関
係が差し示される。この情熱に応える
のが両民族の良心の勇気である。

上製本函入 B4 384ページ 本体6,000円+300円=6,300円
あごら会員の方には送料・税サービスします。

サイレントマイノリティのBOC出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

03-3354-3941 FAX03-3354-9014

郵便振替 00130-3-39331

E-mail boc@mb.infoweb.ne.jp

企画・編集・翻訳...

何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 ☎3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。